「認知症でもだいじょうぶ」町づくりキャンペーン２００７
報　告　書

２００８年（平成２０年）３月

認知症介護研究・研修センター（東京・大府・仙台）
住友生命保険相互会社

ごあいさつ

「認知症でもだいじょうぶ」町づくりキャンペーンは今年で４回目を迎えました。第１回目は平成１６（２００４）年の秋に行われた「国際アルツハイマー病協会第２０回国際会議・京都・２００４」の場において先進的な町づくり活動の報告が行われ、認知症を知り地域をつくる国民的な運動の先駆けとなりました。

その後も本キャンペーンには毎年、日本各地で認知症になっても安心して暮らせる町づくり活動を続けておられる皆様からの御報告をお寄せいただきました。そしてこれらの事例を広く全国にお届けして学びあうことに努めてまいりました。

このたびの「『認知症でもだいじょうぶ』町づくりキャンペーン」には各地から４９に及ぶ活動報告が寄せられました。これらの活動を、堀田力委員長をはじめとする「地域活動推薦委員会」の皆様が検討してくださいました。そして各地域で町づくりの参考として推薦された８つの活動が「町づくり２００７モデル」として報告されます。

いずれの活動の中にも認知症の人と地域の人々がともに尊重しあって暮らしていくための理念と実践が詰まっています。とくに今年のモデルでは、民間企業や学校も含めて多様な立場の方からその活動を報告していただくことになりました。このことは、認知症の人の尊厳を守り、その力を生かしてともに暮らしていくという現代社会の大切な課題が、単に医療・福祉関係者にかかわる事柄ではなく広く市民一人ひとりにかかわることであることを端的に示していると思います。

私たちができることから始めて日本全国のあらゆる地域が認知症になっても安心して暮らせる地域とするために、この発表会が今後の活動のための大きなステップとなることを期待しています。

「認知症でもだいじょうぶ」町づくりキャンペーン２００７
実行委員長　長谷川　和夫

報告書の刊行にあたって

「『認知症でもだいじょうぶ』町づくりキャンペーン２００７」では、２００７年６月より全国で認知症の人を地域で支える活動を展開している活動報告の募集を行い、慎重な検討の結果、２００８年１月に「町づくり２００７モデル」を決定しました。

そして２００８年３月に「認知症を知り　地域をつくる」キャンペーン報告会の場において、表彰式と「町づくり２００７モデル」団体による地域活動の発表を行いました。

本キャンペーンは、厚生労働省と認知症にかかわる各団体による国民的な「認知症を知り　地域をつくる」キャンペーンの一環として行ったものです。

各活動報告の本報告書への収録にあたっては、活動している団体および個人の表現のスタイルを尊重し、原則として原稿に改変を加えることは行っていません。このため、表記に不統一の部分があります。

「『認知症でもだいじょうぶ』町づくりキャンペーン２００７」は、厚生労働省老人保健健康増進等事業の補助金および住友生命保険相互会社のご支援をいただいて運営が行われました。あらためて感謝申し上げます。

本報告書が、全国各地で認知症の人とそのご家族を支える活動を続けておられる皆様のお役に立つように願っています。

２００８年３月

「認知症でもだいじょうぶ」町づくりキャンペーン２００７　事務局

目　　次

Ⅰ.「認知症でもだいじょうぶ」町づくりキャンペーン2007総括

1.「認知症でもだいじょうぶ」町づくりキャンペーン2007実行委員長から経過報告(発表会より)　3

2.「認知症でもだいじょうぶ」町づくりキャンペーン2007地域活動推薦委員長から総括(発表会より)　4

3. 全応募者への応援メッセージ　5

Ⅱ.「認知症でもだいじょうぶ」町づくりキャンペーン2007へ全国から寄せられた活動一覧

1. 全国から寄せられた地域活動 応募一覧　11

2. 各地域報告の情報データベース(町づくりキャンペーンホームページ)の紹介　13

3.「町づくり2007モデル」一覧　14

4.「町づくり2007モデル」

活動報告(1)「認知症になっても安心して暮らせるマンション」　15

中銀インテグレーション株式会社(東京都中央区)

活動報告(2)「当たり前の権利である地域行事・老人会への参加を目指して」　23

社会福祉法人 ふるさと会 グループホーム福寿の家(高知県吾川郡いの町)

活動報告(3)「教科 奉仕『認知症と地域について考える』授業」　37

東京都立拝島高等学校(東京都昭島市)

活動報告(4)「この町にこんな病院があったらいいな(地域にとけ込んだ認知症センターの取り組み)」　50

財団法人 豊郷病院 老人性認知症センター(オアシス)(滋賀県犬上郡豊郷町)

活動報告(5)「おじいさん、おばあさん、いっしょにキャンプしませんか！

認知症高齢者と楽しむ『あしがらシニアキャンプ』」　64

あしがらシニアキャンプ実行委員会(神奈川県南足柄市・足柄上郡5町)／

社団法人 日本キャンプ協会(東京都渋谷区)

活動報告(6)「認知症の人と家族のつどいと支援者養成研修」　78

社団法人 認知症の人と家族の会富山県支部(富山県富山市)

活動報告(7)「若年性認知症デイサービス"おりづる工務店"の取り組み」　86

社会福祉法人 町田市福祉サービス協会 おりづる苑せりがや(東京都町田市)

活動報告(8)「地域の認知症の拠点としてのグループホームの活動」　98

NPO法人 ほのぼの朝日ネットワーク(岐阜県高山市)

5. 各地域活動概要　110

Ⅲ. 資料編

1. 実施要領　153

2. 推薦基準　157

3. 発表会について　158

附:活動経過　161

Ⅱ.「認知症でもだいじょうぶ」町づくりキャンペーン2007へ

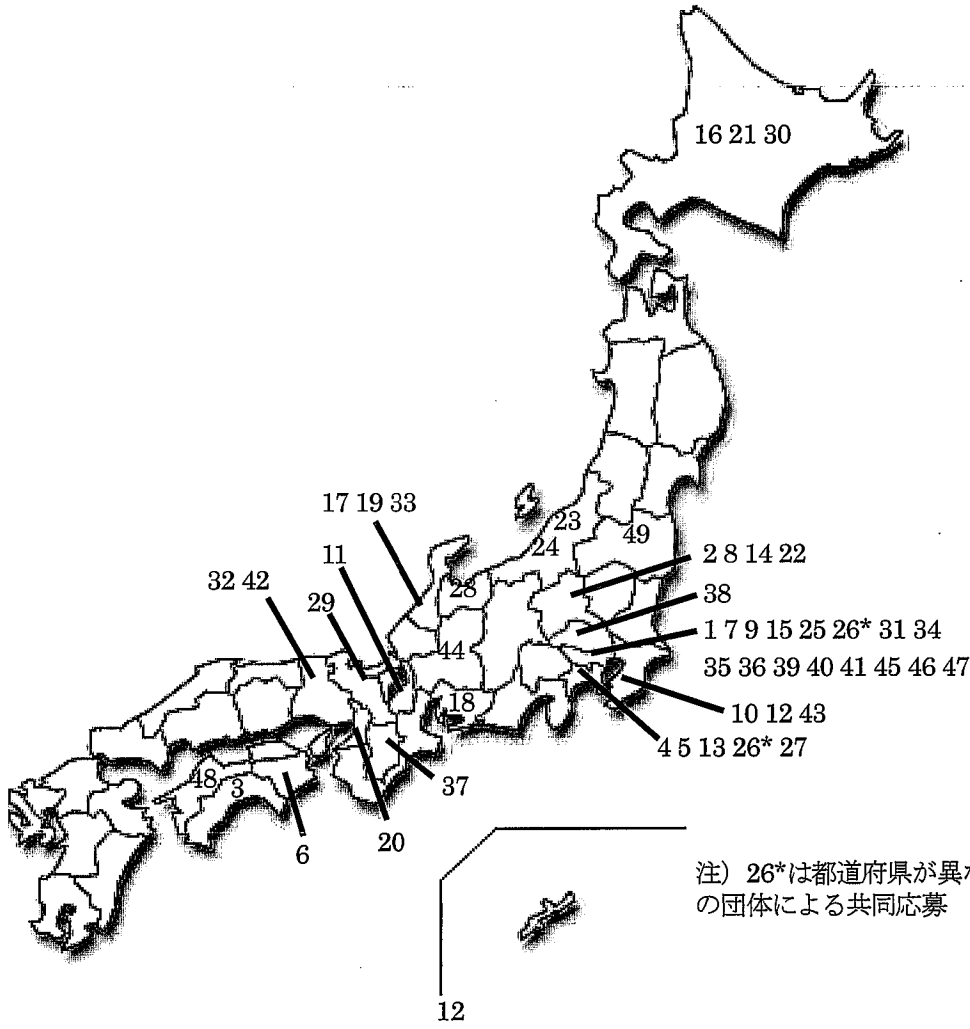
全国から寄せられた活動一覧

1. 全国から寄せられた地域活動 応募一覧

（応募先着順）

No.	活動名称	応募者名称	掲載頁
1	認知症になっても安心して暮らせるマンション	中銀インテグレーション（株）	15
2	地域の人達と共に健康体操教室に参加	総合ケアセンター榛名荘内 グループホーム榛名荘	110
3	当たり前の権利である地域行事・老人会への参加を目指して	（社福）ふるさと会 グループホーム福寿の家	23
4	「認知症を知るための取組」	NPO 法人 福祉振興会	111
5	地域で支えよう認知症	にこにこクラブ	112
6	生涯学習町づくり回想法	コスモスの会・校舎の無い学校	113
7	教科 奉仕「認知症と地域について考える」授業	東京都立拝島高等学校	37
8	認知症の傾聴ボランティア	シニア・傾聴ボランティア	114
9	ねたきり、認知症の方をかかえる家族の会	小平 わかばの会	115
10	認知症メモリウオーク・千葉	認知症メモリウオーク・千葉実行委員会	116
11	この町にこんな病院があったらいいな（地域にとけ込んだ認知症センターの取り組み）	（財）豊郷病院 老人性認知症センター（オアシス）	50
12	古民家を拠点になじみの空間を大切にし、認知症の方もそうでない方も、地域の誰もが寄りあえる場所づくりを	NPO 法人 こだま	117
13	独居老人の認知症を支えあう地域と地域包括支援センターのかかわり	小田原市第五地区地域包括支援センター	118
14	沼田市認知症にやさしい地域づくりネットワーク	医療法人 大誠会 内田病院	119
15	もりたや project	（社福）櫻灯会 グループホームさくらの家 東矢口	120
16	認知症フレンドシップクラブ	認知症フレンドシップクラブ	121
17	認知症及び認知症予防の啓発活動	いちご会	122
18	住み慣れた町での生活の継続	（社福）恩賜財団愛知県同胞援護会 グループホーム春緑苑	123
19	能美市学官連携プロジェクト	共生ケア研究グループ	124
20	認知症の要介護者の介護に大きな力を発揮する「えがおの会」	阿倍野介護家族の会・えがおの会	125
21	″ひなたぼっこ（INA）い～なあ一″	介護支援専門員	126
22	多職種で認知症ケア研究を推進する 「ぐんま認知症アカデミー」の取り組み	ぐんま認知症アカデミー	127
23	介護事業者による「地域の『人』づくり『場』づくり」の試み	（株）てるてるぼうず	128
24	利用者とスタッフとの協働による地域との交流	グループホーム 七福神	129
25	離れて暮らす親のケアを考える会	NPO 法人 パオッコ	130
26	おじいさん、おばあさん、いっしょにキャンプしませんか！認知症高齢者と楽しむ「あしがらシニアキャンプ」	あしがらシニアキャンプ 実行委員会/ （社）日本キャンプ協会	64
27	認知症を学び地域で支え合う・なじみのふるさとづくり -寄り添い人の養成、訪問、世代間交流のお誘い-	開成町社会福祉協議会 なじみのふるさとづくり研究会	131
28	認知症の人と家族のつどいと支援者養成研修	（社）認知症の人と家族の会 富山県支部	78
29	長岡京の温もりの通い合う街づくりに向けて～やすらぎ支援員のネットワークの役割～	長岡京市 やすらぎ支援員	132
30	「積小為大」 ～小さな有限会社の足下から認知症の人の“力”を発信していこう～	(有)エーデルワイス	133
31	「成年後見推進ネットこれから」の活動	NPO 法人 成年後見推進ネットこれから	134
32	まちのなかのきらくえん -認知症の人の「市民的自由」の尊重	（社福）きらくえん	135
33	地域人として生きる -誰もができることを通してつながる-	NPO 法人 志ネット・石川	136
34	グループホーム入所者による公園清掃活動	（社福）浴風会 グループホームひまわり	137
35	高齢者が安心してご利用いただける店舗を目指して	三菱UFJ信託銀行（株）	138

36	認知症の人を支える地域医療の経験と課題　～在宅支援診療所から～	医療法人社団つくし会　新田クリニック	139
37	毎日の生活を地域のなかで　地域の輪そしてひろがり…	(株)ひまわりの会　ぽれぽれグループ	140
38	一粒の麦（傾聴ボランティアにおける愛の見守り）	草加市認知症高年者家族　やすらぎ支援事業　やすらぎ支援員　矢管健司	141
39	地域と施設で暮らす交流の場	憩いの場「優しい時間」	142
40	グループホームと商店街の交流からはじまった「認知症でもだいじょうぶ」の町づくり	グループホーム　えがおの家	143
41	若年性認知症デイサービス"おりづる工務店"の取り組み	(社福)町田市福祉サービス協会　おりづる苑せりがや	86
42	グループホームいろりの取り組み	(有)KYT　グループホームいろり	144
43	認知症ケアのネットワークづくり(佐倉市西南部編)	認知症ケアネットワーク　CB	145
44	地域の認知症の拠点としてのグループホームの活動	NPO法人　ほのぼの朝日ネットワーク	98
45	「認知症の人から町の人へのメッセージ」	町田市グループホーム連絡会	146
46	～中庭をつかって～　地域と共につくる認知症の人の環境づくり	医療法人社団芙蓉会ふよう病院　グループホームあおぞら	147
47	「デイホームにんじん・家族の会」　～認知症の方と家族の方々の集い～	(社福)にんじんの会「家族の会」	148
48	認知症になっても、障害をもっても地域でいきいきと暮らせる為に　～小さな田舎町(愛南町)での取り組み～	愛南町・なんぐん地域ケア研究会・南宇和郡医師会・認知症の人と家族の会愛媛県支部(南予地区)・認知症キャラバンメイト・愛南町ボランティア連絡会・南宇和心の健康を考える会・南宇和障害者の社会参加を進める会	149
49	～認知症を囲む新たな地域コミュニティゾーンの構築を目指して～	(社福)ライフ・タイム・福島グループホームフクチャンち	150



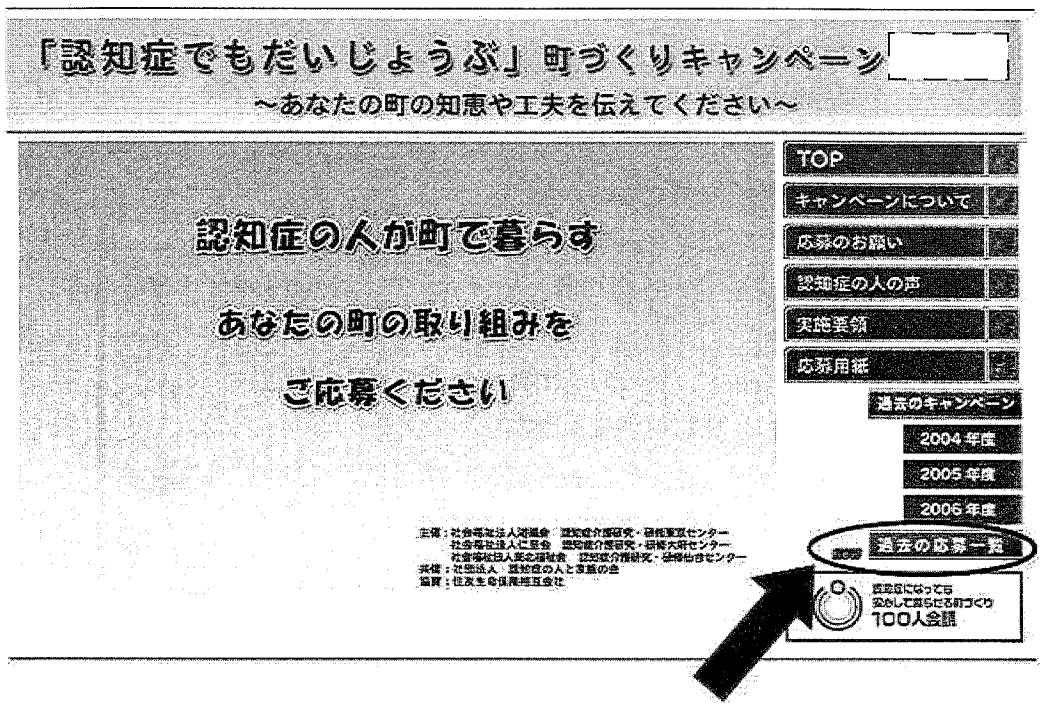
注）26*は都道府県が異なる２つの団体による共同応募

2. 各地域報告の情報データベース（町づくりキャンペーンホームページ）の紹介

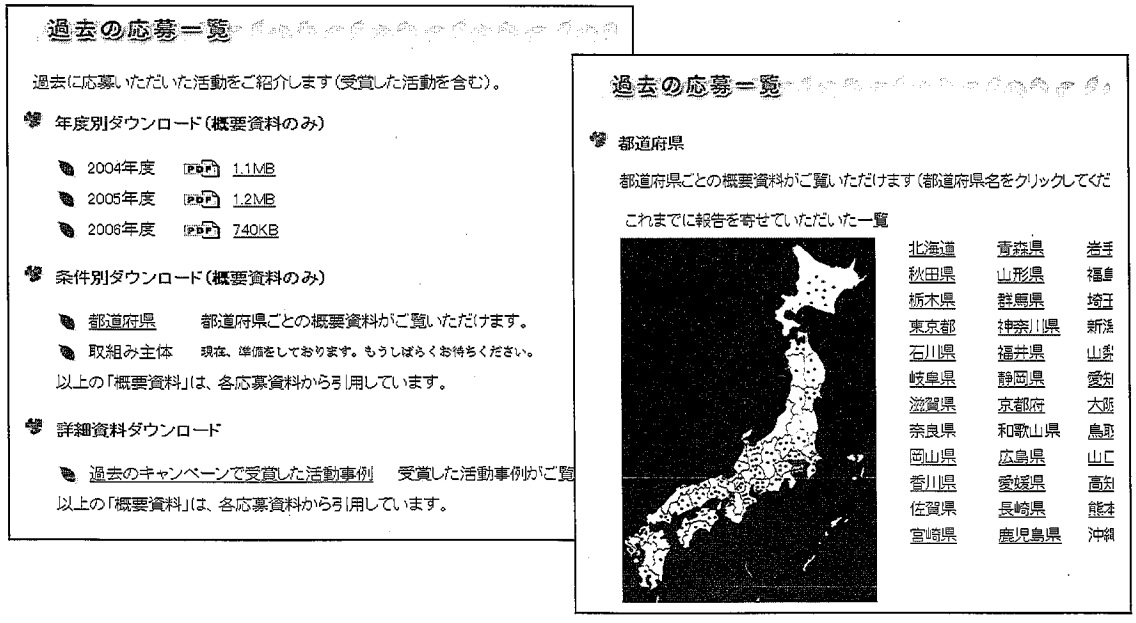
町づくりのさまざまな取り組みがご覧いただけます。

URL　http://www.dcnet.gr.jp/campaign/

または「町づくりキャンペーン」で検索してください



（リニューアル中。平成20年6月更新予定）



※今年度から始まった「認知症地域支援体制構築等推進事業」の全国の担当部署へ本資料を提供させていただきました。

3.「町づくり2007モデル」一覧

（応募先着順）

1 「認知症になっても安心して暮らせるマンション」
中銀インテグレーション株式会社（東京都中央区）

2 「当たり前の権利である地域行事・老人会への参加を目指して」
社会福祉法人 ふるさと会 グループホーム福寿の家（高知県吾川郡いの町）

3 「教科 奉仕『認知症と地域について考える』授業」
東京都立拝島高等学校（東京都昭島市）

4 「この町にこんな病院があったらいいな
（地域にとけ込んだ認知症センターの取り組み）」
財団法人 豊郷病院 老人性認知症センター（オアシス）（滋賀県犬上郡豊郷町）

5 「おじいさん、おばあさん、いっしょにキャンプしませんか！
認知症高齢者と楽しむ『あしがらシニアキャンプ』」
あしがらシニアキャンプ実行委員会（神奈川県南足柄市・足柄上郡5町）／
社団法人 日本キャンプ協会（東京都渋谷区）

6 「認知症の人と家族のつどいと支援者養成研修」
社団法人 認知症の人と家族の会富山県支部（富山県富山市）

7 「若年性認知症デイサービス“おりづる工務店”の取り組み」
社会福祉法人 町田市福祉サービス協会 おりづる苑せりがや（東京都町田市）

8 「地域の認知症の拠点としてのグループホームの活動」
NPO法人 ほのぼの朝日ネットワーク（岐阜県高山市）

4. 町づくり2007モデル
活動報告（1）

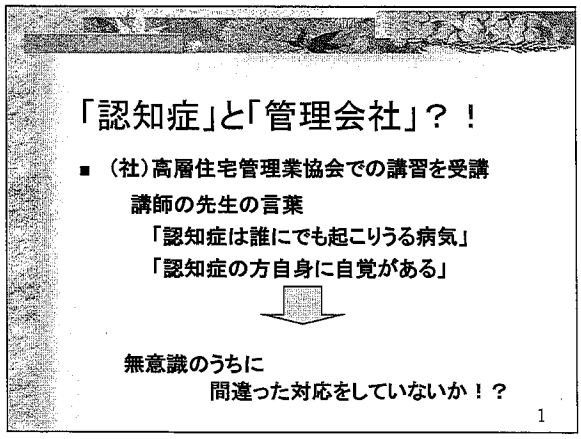
活動名称	認知症になっても安心して暮らせるマンション
活動要旨	所属する業界団体の認知症サポーター講座をきっかけに社内で講座を実施。ゴミ分別方法が一目でわかるイラストを作成し、マンション管理員が地域包括支援センター職員と顔合わせして住人との連絡役となるなど、できることから実践
応募者	中銀インテグレーション株式会社　久保田　雅子
連絡先	〒104-0061　東京都中央区銀座 8-16-10

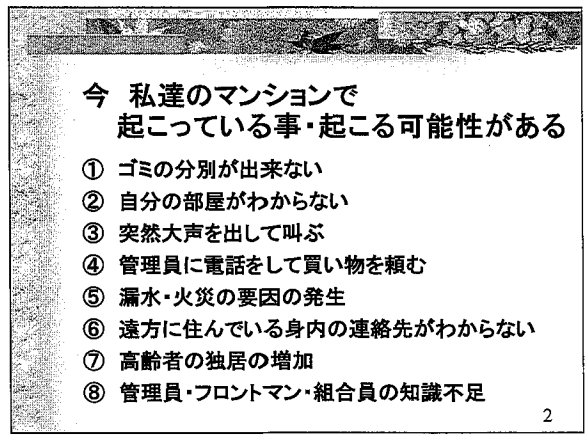
1）推薦理由

- 管理員が認知症を理解し、細やかな工夫をすることで、マンション内で認知症の人たちの暮らしやすさに向けた支えが生まれている。今後全国的に、マンション暮らしの認知症の人が増えていくことが考えられ、先駆的で重要な取り組み。
- 日常生活の場であるマンションが安心して住める場になることはとても大切で、こういう取り組みがもっと広がって欲しい。管理員を置く全国の共同住宅の経営者に取り組んでもらいたい活動のモデルである。
- マンション管理員とともに、住人自身の理解と支えあいが広がっていくことが大切であり、この活動が継続的に発展していくことが期待される。
- マンションにとどまらず、この取り組みを参考に、スーパーや商店街など町の様々な生活領域で、その担い手が率先して動き出す活動が広がっていってほしい。
- 認知症の方々が暮らしやすい場やコミュニティづくりは、子どもやその親たちにとっても住みやすい社会であると改めて考えさせてくれる活動である。

2）3月1日キャンペーン発表会　発表資料

町づくりキャンペーンホームページからダウンロードができます。





私達「管理会社」に出来ること

お金ではなく「心」をつかった対応を
管理会社が実行し組合にも理解を広める

対応例

① 相手が叱責されたと感ずる対応をしない
② ゴミの分別等の張り紙は絵で表示
③ 結論は先、説明は後
④ ゆっくり話す、優しく話す　笑顔で話す
⑤ 支援センターの連絡先を管理室に表示

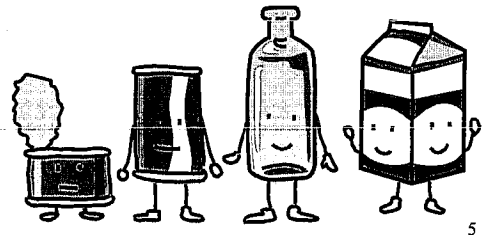
3

「認知症を理解する講習」を開催

- 管理物件の管理員・フロントマン・社員（約 100 名）を対象

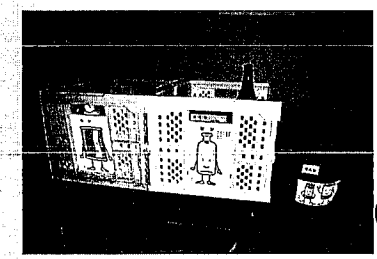
一目でわかるイラストを作成

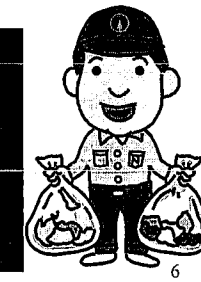
- 小さな子供から高齢者までわかるイラスト



5

現地マンションのゴミ置場





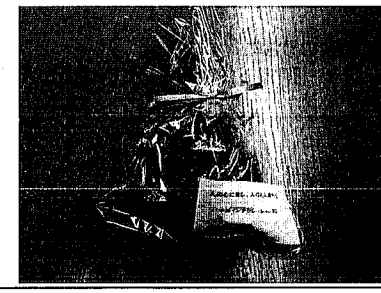
6

負担にならずにできる事の実践

- 管理マンションの「地域包括支援センター」一覧を管理室・掲示板に掲示
  - 地元の地域包括支援センターに管理員が顔合わせ
  - 住民からの相談があった場合は支援センターの連絡先を伝える。

7

すべては人の心に発し、人の心に終わる



8

3)キャンペーン応募資料(全)

1．概　要

<活動のきっかけ>

平成１８年７月４日に開催された、社団法人　高層住宅管理業協会による「マンション管理適正化法に基づく法人研修」の中で、認知症の講習（認知症サポーター講座）が行われた。「何故、管理会社が認知症講習？」という疑問から、先生の言葉の中の「他人事ではなく誰にでも起こりうる病気」「認知症の方には自覚があり、誰にも相談出来ない悲しみがある」「自分の一部がなくなっていく病気」に衝撃を受ける。

受講後、先生と名刺を交換し帰社後すぐに企画書を提出。会社への呼びかけのきっかけとなった。

<活動の内容>

■「認知症を理解する講習」の開催

平成１８年９月　第一回の講習会（認知症サポーター講座）を実施

管理物件（マンション）の管理員、フロントマン、社員など約１００名を対象

平成１９年５月　第二回の講習会（認知症サポーター講座）を実施

■認知症の方への配慮

・ゴミ分別をわかりやすくするため、一目でわかるイラストを作成

ー認知症の方だけではなく小さなお子様でもわかるようにゴミ置場に数種類のイラストシールを貼った。今までゴミの分別についてトラブルがあったが、イラストにより管理員からは注意をして気まづくなる場面が減り、ストレスが軽減されたと予想外の効果あり。

■負担にならずに出来る事の実践

・管理マンションの「地域包括支援センター」一覧を管理室・掲示板に掲示

ー地元の地域包括支援センターと管理員が顔合わせ。住民からの相談があった場合は支援センターの連絡先を伝える。

<成果と今後の展望>

・今後も講習会（認知症サポーター講座）を１年に１回の実施予定（管理員交代に対処）

・認知症サポーターになった社員の中で、自主的にオレンジリングをつけている人が増加

認知症サポーターの証、オレンジリングには「すべては人の心に発し、人の心に終わる」ー先代の創始者　渡辺　酉蔵社長（平成３年１０月、７０歳で死去）の名言の一つーをオレンジの文字でプリントシールにして貼りつけラッピングをして配布。

「認知症」の方だけではなく、どのような方に対しても心からの行いをする事で、道はつながるはず。やり方は一通りではなく、一人一人考え方が異なるようにたくさんのやり方がある事が素晴らしい事。各自の負担のないやり方が長続き出来るのではないか。

２．地域の紹介

弊社は下記のような営業エリアをもっており、一つの地域のみでの活動ではないため、下記の「営業エリア一覧」をもって「地域の紹介」とする。これらの地域で、認知症の方が住みなれた家で安心して暮らしていけるためのお手伝いとなる取り組みを行っている。

（営業エリア一覧）

中銀の管理マンション

東京都２３区を主に、その他神奈川県、多摩区、埼玉県にて約１００物件において活動中。

３．活動の内容

■活動のきっかけ

平成１８年７月４日に開催された、社団法人　高層住宅管理業協会による「マンション管理適正化法に基づく法人研修」の中で、認知症の講習（認知症サポーター講座）が行われた。「何故、管理会社が認知症講習？」という疑問から、先生の言葉の中の「他人事ではなく誰にでも起こりうる病気」「認知症の方には自覚があり、誰にも相談出来ない悲しみがある。」「自分の一部がなくなっていく病気」に衝撃を受ける。

今まで、認知症の知識がなかった為、傷つける言葉を発しているのではないか、管理員からの苦情の中で、後回しにしている事がないか不安になる。早く講習を受けなければならないと思い、受講後すぐ先生の後を追い、失礼ながらエレベーターの中で名刺交換、帰社後すぐに企画書の提出。会社への呼びかけのきっかけとなった。

■今、私達のマンションで起こっている事・起こる可能性がある事

認知症の方を含む高齢者の増加でマンションの現場で起きているさまざまな問題

① ゴミの分別が出来ない

※ゴミの分別がきちんと出来なかったり、曜日を間違え、管理員が叱責してしまうケース。

② 自分の部屋がわからない

③ 突然大声を出して叫ぶ

※上記二つは、階下からの苦情が出て、実際にフロントマンが自宅を訪ね、怒らせてしまうケース。

④ 管理員に電話をして買い物を頼む

※高齢化が進んだマンション、地域によっては管理員を自分の使用人と思い込むケース。
単身住込の女性管理員が巻き込まれるケースが多く、最初に手伝ってしまうと要求が増し、断ると嫌がらせがエスカレートし、管理員が精神的に追い込まれたケース。又、認知症の方には手伝えて、どうして高齢者の私の荷物は持てないのかという場面も起きている。

⑤ 漏水・火災の要因の発生

⑥ 遠方に住んでいる身内の連絡先がわからない

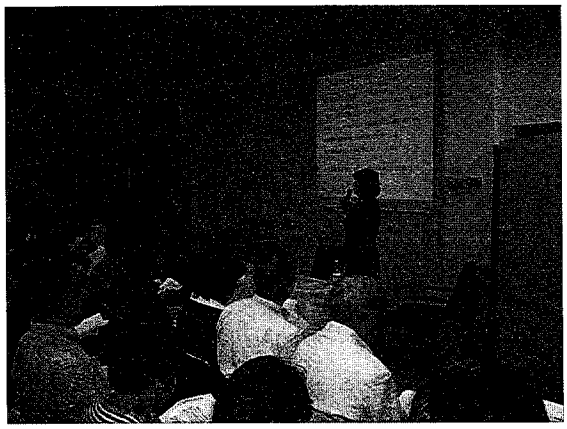
⑦ 高齢者の独居の増加

⑧ 管理員・フロントマン・組合員の知識不足

■「認知症を理解する講習」の開催

第一回「認知症を理解する講習」を、地域ケア政策ネットワーク事務局長　菅原弘子様を講師に、平成１８年９月２５日に実施。この講習は、認知症サポーター講座として行われ、受講者には認知症サポーターの証である「オレンジリング」が配られた。

管理員・フロントマン全員が集中して聞いていた。メモを熱心に取る姿も見られ、もっと早く受講したかったという意見も出た。



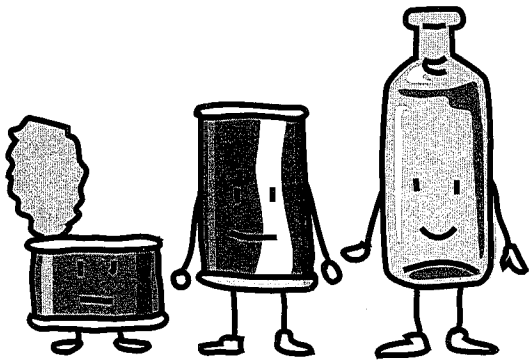
管理物件の管理員・フロントマン･社員（約１００名）を対象

第二回の講習会（認知症サポーター講座）を平成１９年５月にも開催。４月より入社の新人社員が主に受講。社員の中でもオレンジリングをはめる者が増えてきたが、強制はしていない。

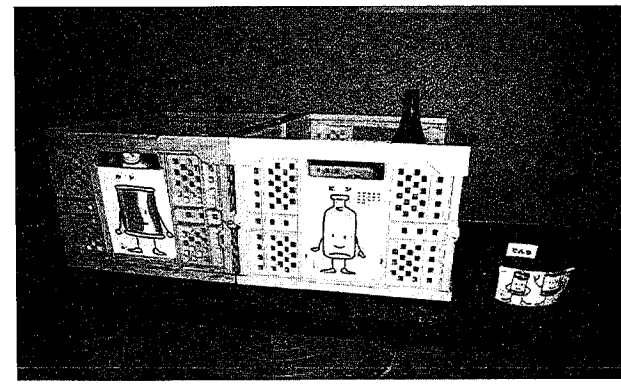
管理員交代もあるので、１年に１回のペースで認知症サポーター講習を行なう予定。

■認知症の方への配慮

・ゴミ分別をわかりやすくするため、一目でわかるイラストを作成



認知症の方だけではなく
小さなお子様でもわかるように



現場マンション　ゴミ置場の使用例
ゴミ置場が明るい雰囲気に

今まではゴミの分別がわからない等で管理員が仕分けに苦労したり、叱責してしまう等の問題があった。これに対処するため、認知症の方だけではなく小さなお子様でもわかるように数種類のイラストシールを作成し、ゴミ置場に貼った。

イラストはデジタルクリエイターのヒラヤマ　ユウジ氏にお願いし、何度も検討を重ね、優しいタッチで作成。

管理員やお客様からもゴミ置場が明るくなり、分別して出してくれる方も増えたようだとの声を頂く。又、管理員から、注意をして気まづくなる場面が減り、ストレスが軽減されたと予想外の効果もあった。

■負担にならずにできる事の実践

・管理マンションの「地域包括支援センター」一覧を管理室・掲示板に掲示

地域包括支援センターは多数あり名称もさまざまである。各管理員にマンションを管轄している地域包括支援センターに出向き担当者と顔合わせをしてもらい、中銀インテグレーション㈱の管理物件の「地域包括支援センター一覧表」を作成。一覧表は管理室・掲示板に掲示している。

実際いくつかのマンションで高齢者の方の不安や相談事が管理員にあり、地域包括支援センターの連絡先を伝えた事により大変喜ばれた報告を受けた。

苦しいこと、ストレスになる事は長続きはしない。管理員には常にフロントマンと連携をとり、プライバシーに係わることには踏み込まないよう指示。

管理員・フロントマンは「ケアスタッフ」でないため、あるレベル以上は行政に任せる事で負担もなく、日常業務にも支障は出ていない。

■私達「管理会社」に出来ること－対応の基本

お金ではなく「心」をつかった対応を管理会社が実行し組合にも理解を広める

－建物のバリアフリーではなく「心」のバリアフリーも同時進行

・対応の基本

① 相手が叱責されたと感ずる対応をしない

② ゴミの分別等の張り紙は絵で表示

③ 結論は先、説明は後

④ ゆっくり話す、優しく話す

⑤ 支援センターの連絡先を管理室に表示

※　参考資料を添付

４．活動の成果と今後の展望

・今後も講習会（認知症サポーター講座）を１年に１回の実施予定（管理員交代に対処）
・認知症サポーターになった社員の中で、自主的にオレンジリングをつけている人が増加

研修後、お金では決して買えないオレンジリングを手渡した。テキストと一緒に袋に入れてオレンジリングを忘れてしまわないようお菓子を添えて、オレンジのリボンでラッピングした。

「すべては人の心に発し、人の心に終わる」。これは、先代の創始者　渡辺　酉蔵社長（平成３年１０月、７０歳で死去）の名言の一つだが、心からの行いをしなければ本当の事は伝わらないと言われている気したので、この言葉をオレンジの文字でプリントシールにしてラッピングに貼った。

この活動は、現在の社長　渡辺　蔵人（子息）が賛同し、会社を挙げての取り組みが始まった。「認知症」の方だけではなく、どのような方に対しても心からの行いをする事で、道はつながるはずである。やり方は一通りではなく、一人一人考え方が異なるようにたくさんのやり方がある事が素晴らしい事。各自の負担のないやり方が長続き出来るのではないかと考える。

「すべては人の心に発し、人の心に終わる」

<参考資料>

活動報告(2)

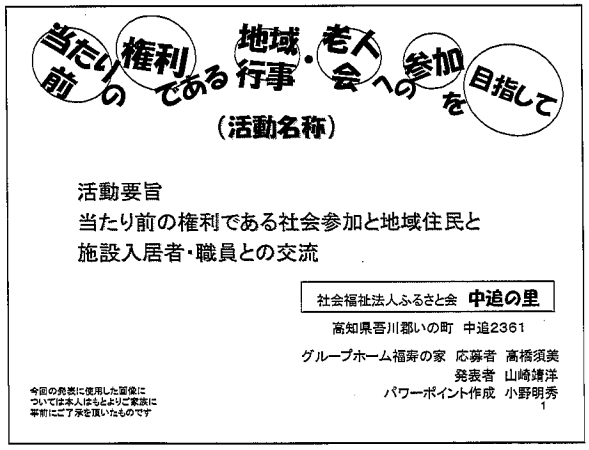
活動名称	当たり前の権利である地域行事・老人会への参加を目指して
活動要旨	観光温泉施設を改装して建てられ、山間部にあるため地域とのつながりが弱かったが、入居者と職員による小学校の運動会への参加をきっかけに地域との結びつきが深まる。グループホームが認知症の人の理解と支援を地域で進める拠点になりつつある
応募者	社会福祉法人　ふるさと会　グループホーム福寿の家　高橋　須美
連絡先	〒781-2142　高知県吾川郡いの町中追 2361

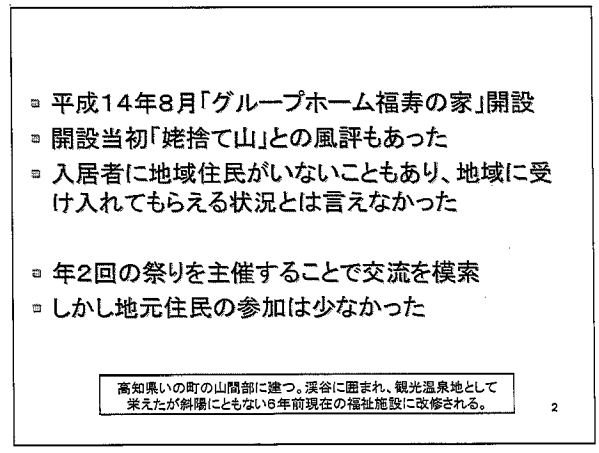
1)推薦理由

- 町の中心から離れた土地に建てられたグループホームや施設が少なくない現状で、その利用者が孤立しないで地域とつながって暮らし続けられるよう支援することが全国的に大きな課題になっている。このホームは不利な立地条件の中でも地域交流の試行錯誤を積み重ね、地元の人々との確かなつながりを築いており、その経緯を他地域でもぜひ参考にして欲しい。
- 交流にとどまらず、過疎化が進む地元の課題解決にむけて、町の介護予防事業や認知症サポーター養成、移送サービスなどに積極的に取り組み、地域にとってもかけがいのない場として定着してきている点は、過疎地域での共に支えあう町づくりのモデル。

2)3月1日キャンペーン発表会　発表資料

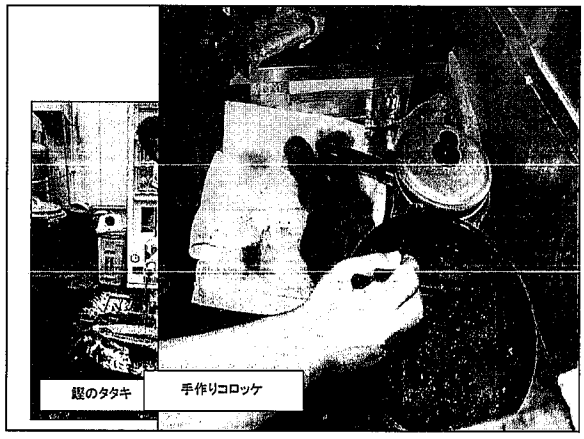
町づくりキャンペーンホームページからダウンロードができます。





平成18年度「運営推進会議」発足

祭りの時の送迎車を出す競室を設ける等の具体的な
取り組みを提案
地域住民の参加が増えてくる



きっかけは‥運動会

やがてそれは「グラウンドゴルフ」「体操教室」「認知症 サポーター養成講座
へと交流が深まっていった

体操教室

「福寿の家」が目指すもの

地域密着型サービス事業所の利点を活かすことで行政では担いきれない
部分の手助け、またその現状を伝え、地域の情報源となっていきたい

・今後も地域交流の実践を対外的に発表していくことでケアや地域交流の実践を
検証する機会とし、常に進化するケアを目指したい

・今回の受賞を地域住民の皆様に報告した時、拍手の輪が広がり、「わしらも
行きたいのう(授賞式)」と協賛の言葉を

ご清聴ありがとうございました

グループホーム福寿の家

3)キャンペーン応募資料(全)

１．概　要

平成１４年の８月「グループホーム福寿の家」を開設した。開設当初「姥捨て山」との風評も、聞こえてくる。入居者の中に地域住民がいないこともあり、地域に受け入れて頂いている状況とは言えなかった。

山間部にある、不便な状況での地域との関わりのきっかけは、勝賀瀬小学校の運動会であった。生徒数が２名という少人数で「小学校・地区民運動会」と言うことで、地域の方が大勢参加している。「やってみようか」と言う入居者の声に、職員が付き添うことで、殆どのプログラムに参加することができた。マスト登り等、高齢化で若者が少ないため、職員が競技に参加し職員も楽しんでいる。運動会後の、懇親会へも入居者数名・職員も参加する。小学校主催・地区住民参加のグラウンドゴルフへの参加も、早２年が過ぎようとしている。

また、「中追の里」では、年に２回、春の「新緑祭り」秋の「もみじ祭り」と、渓谷内を利用した祭りを開催し、地域の方に地元の地場産品や野菜を出品販売して頂き、地域に伝わる伝統芸能＜浦安の舞＞（平成１９年度継承者なし）や落語を、小学校の児童に披露してもらう等、交流も確かなものとなってくる。

勝賀瀬地区の老人会「やすらぎの会」が毎週火曜日に、いの町保健福祉事業の介護予防事業の一環である「るんるん若ガエル体操」を行っており、参加させて頂くようになる。現在では、老人会の一部の行事にも、参加させて頂いている。

交流を深めていく中で、地域の方に、認知症について理解して頂くことの必要性を感じ、運営推進会議の中で「認知症サポーター養成講座」の開催を提案、運営推進会委員の方の協力もあり、地域の方が多数（５４名参加）参加され、大盛況で開催をすることができた。

８月から始まった、いの町主催・地域支援事業（地域介護予防活動支援事業）「るんるん若ガエル体操サポーター養成講座」に６名の職員が参加する。「るんるん若ガエル体操サポーター養成講座」フォローアップ研修として、「認知症サポーター養成講座」開催の計画もある。中追地区への体操教室導入時、山間部で送迎が必要な方にグループホームより送迎車を出し、サポーターとしていの町ほけん課との協働が始まる。現在もグループホーム職員が送迎に行き、毎週月曜日の自主継続に参加し協力している。１０月１４日（日）中追地区敬老会に、初めて７名の入居者の方が参加する。

地域行事への参加時、年齢の近い方と会話する入居者の姿はグループホームで見せる姿と違い、凛とした社会人の顔を見ることができる。

【概　要】

山間部の渓谷に建つ「グループホーム福寿の家」
設立時、地元民が入居者にいなかったため、「姥捨て山」との風評
地域との交流を模索する

きっかけは“運動会”
交流は次第に広がり、週２回の“グラウンドゴルフ”への参加は２年を過ぎようとしている

交流は参加するだけに留まらず
「認知症サポーター養成講座」を開催
多くの地域住民で大盛況となる

また施設内でも年２回の祭りを開催
今では恒例行事となっている

２．地域の紹介

グループホーム「福寿の家」は高知県いの町中追の山間部に建っている。観光温泉施設として数十年前に設立したのち平成１４年８月建物の一部をグループホームとデイサービスとして改装し、現在観光施設と福祉施設が共存する、珍しい立地にあるグループホームであり、休日には観光客との出会いなどもある。総称を「中追の里」と言う。

「中追の里」はＪＲいの駅から国道１９４号線を西へ車で約１０分、勝賀瀬橋を右折して、渓谷に沿って山道を車で約１０分走った場所にある。山と谷に囲まれ、途中にある勝賀瀬地区と「福寿の家」より更に奥の中追地区に挟まれている。その距離は２～３キロあり、どちらへ行くにも近くに民家はない。

（出典：総務省「平成17年国勢調査」）

	人口（人）	世帯数（戸）	高齢者比率（%）
伊野地区	23,377	8,416	24.4
吾北地区	3,002	1,245	44.6
本川地区	689	344	43.7
いの町	27,068	10,005	27.1

（いの町ホームページより）

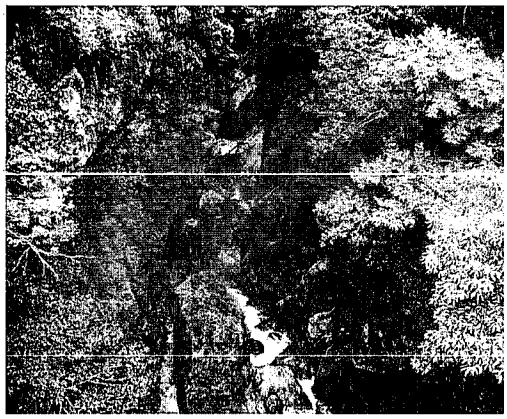
勝賀瀬・中追地区は、伊野地区に含まれる。途中にある勝賀瀬地区は、人口２９３名。過疎と高齢化の進む集落である。昭和５０年に勝賀瀬川の土石流と氾濫により大きな被害を経験している地区である。平成１７年度にも筏津ダムの放流により、仁淀川本流の水位が分流勝賀瀬川の水位を越し、勝賀瀬川に逆流して県道や民家が水災害に遭う。「中追の里」の途中にあり、勝賀瀬小学校（全児童４名）を中心に交流が確立された。掲示板等で情報が得やすい等の利点があった。

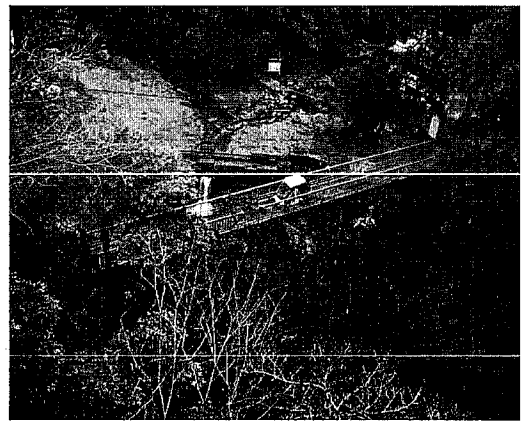
中追地区は、「中追の里」より更に奥へ車で１５～２０分、つづら折りの山道を走った平家の落人伝説の残る山深い所にある。人口１２７名。渓谷を挟み東と西地区がある。平成１９年度中追小学校児童が１名となり休校、勝賀瀬小学校に統合される。年２回の祭りの挨拶以外は、ほとんど出向くこともない状況にあった。

「中追の里」は、中追渓谷観光として栄えていた頃より、地元の住民からは敬遠されていた風評もある。

【概　要】

その昔、観光施設として栄えた建物を
介護施設に改修
今でも観光客の受け入れを継続
観光施設と福祉施設が共存するめずらしい立地





風光明媚とは裏腹に昭和５０年には河川の
氾濫による大災害を被る
（勝賀瀬地区）

３.活動の内容

＜地域の人たちが、遊びに来たり立ち寄ってくれたりするための取り組み＞

開設当初より、秋の「もみじ祭り」（１１月）春の「新緑祭り」（５月）と、大きなイベントを年に２回開催している。プログラムに、地元小学校児童による伝承の浦安の舞（中追小学校休校のため平成１１９年度より継承者なし）落語（勝賀瀬小学校児童）・地元青年による清流太鼓・地区住民によるカラオケ・地元住民による地場産品（田舎寿司・野菜・干し竹の子等）の販売等、恒例となっている。優待券（食券）とプログラムを、地区長様に地域住民の方々に配布して頂いて参加を募っている。運営推進会議で、送迎車を出す・休憩室を設ける等の具体的な取り組みを提案することにより、地域住民の参加も増えてくる。

毎年８月には、開設記念日を設け職員手作りの（中でも鰹のたたき・手作りコロッケは好評）食事会を開催する。平成１９年度初めて、地域の高齢者の方々を送迎することで１０名の参加があった。平成１９年夏休み最後の日曜日には、「子供釣り大会」（定員子供６０名）を観光部門で開催、地元小学校全児童４名を優待する。

＜周辺地域の諸施設からの理解と協力を得られるために＞

消防＝・防火訓練の実施・施設で救命講習開催（職員１５名参加）

・救急車要請時、夜間、山道で暗く中追の里入り口が分かり難いため、入り口に看板を設置（夜光塗料）する。夜間誘導灯を施設内に点灯している。

地元小学校＝＜勝賀瀬小学校＞（全校生徒数４名）

・小学校主催で地域住民参加のグラウンドゴルフに平成１７年１０月より参加する。（毎月５の付く日）認知症高齢者と実際に交流することで、認知症高齢者を理解して頂く。

・平成１９年度勝賀瀬小学校校長先生の交代があり、保護者より懇親会へのお誘いがあり、入居者４名・職員４名参加する。

・中追の里イベントへの参加・招待

＜中追小学校＞（全校生徒数４名）

・毎年３月ひな祭りの時期に、施設訪問があり、歌・合奏・高齢者との交流（あやとり・お手玉等、昔懐かしい遊びを一緒に楽しむ）

・毎年卒業式に案内があり参加する。（施設長のみ）

・平成１９年３月休校＝記念式典に参加（施設長のみ）

地元レストラン＝・予約して外食（モーニングサービス含む）

＜ホームの機能を、入居者のケアに配慮しつつ、地域に開放しているか＞

地域との交流の機会が増え、認知症について正しく理解して頂くために、平成１８年度最後の運営推進会議として、グループホーム福寿の家主催で、地域住民対象に「認知症サポーター養成講座」を勝賀瀬公民館で開催する。地域住民５４名（中追地区６名）参加があり、認知症に対する意識の高さが伺えた。

年に２回の「祭り」イベントに、高知市内の介護専門学校にボランティアを要請し、毎回１５名程の協力がある。

＜地域の人たちとの交流＞

勝賀瀬地区との交流は、運営推進会議委員でもある民生委員の協力により確かなものとなった。昨年末にはやすらぎの会（老人会）主催クリスマス会への参加。毎週火曜日の体操教室への参加は、現在も続いている。担当の民生委員が他の用事で参加できないときは、「中追の職員さんに前でやってもろうて」と頼まれることもある。

５の付く日のグラウンドゴルフでは、移動しながら地域住民の方と楽しそうに会話されている入居者の、地域の方と変わらない、いきいきとした表情が見られる。

秋の、小学校・地区民運動会では、入居者の「出てみようか」と言う声をきっかけに、ほとんどの競技に職員が付き添い参加する。最近では、地域の方に入居者をお任せすることもある。マスト登り等、若者が少ないため、職員が競技に参加し職員も楽しんでいる。

運動会後の、懇親会へも入居者数名・職員も参加する。

平成１９年８月中追の里５周年記念日には、１０名ほどの地域住民の参加がある。

また、夏休み最後の「こども釣り大会」には、小学校児童全員（４名）と保護者の参加があった。

中追地区との交流は、なかなか確立が困難であった。小学校の行事に、福祉施設として案内があり参加するに止まっていた。

平成１９年２月２８日「認知症サポーター養成講座」への参加呼びかけ時に、送迎車を出すことで、６名の参加者があった。福寿の家より更に２０分以上の山間に、独居の高齢者が生活している現状も判明した。

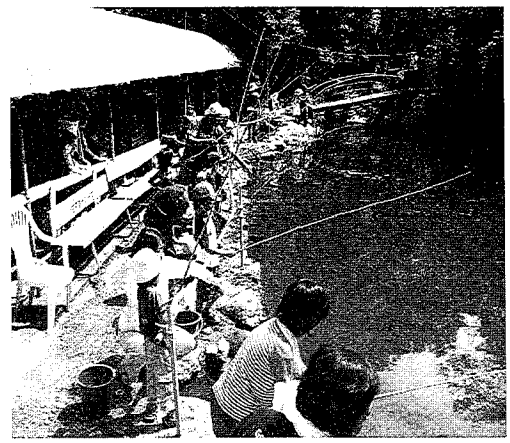
その後、「新緑祭り」や中追の里５周年記念も、送迎車を出すことで参加して頂く。

８月２１日より、いの町ほけん課介護予防事業の一環で、中追地区での開催日時等について相談のあった「るんるん若ガエル体操教室」が開催される。いの町より送迎車は出していない為、自主参加が困難な方４名の送迎を福寿の家が担当する。毎週火曜日３回コースで体力測定・体操の指導等が行なわれ、福寿の家といの町との協働が始まる。教室最終日、「来週からどうしたらえいのか」「町から来てくれるか」と継続を希望される声が住民の方より上がった。自主開催、毎週月曜日１０時から、福寿の家協力で実施と決定する。「体操の前に血圧を測ったらどうじゃろう」と意見も出る。第１回参加者１７名、福寿の家職員が主体となり、送迎・健康チェック（バイタルチェック）を希望者に実施後、体操を開始する。いの町職員参加あり。上がり框まで住民で一杯であった。第２回参加者２０名いの町職員祭日のため参加なし。「これで、地区全員！」との声が聞かれる。会場は活気に溢れる。畳の部屋から作業所の広いスペースへ場所を移し実施する。

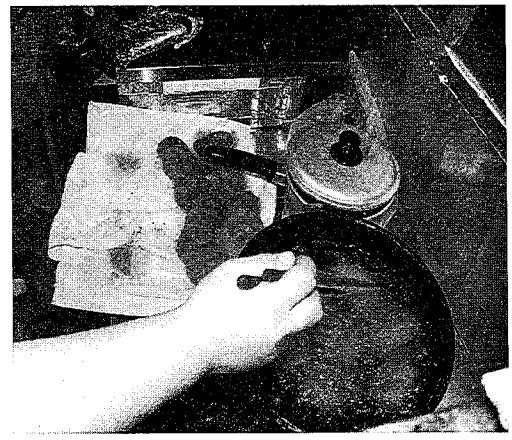
事前に、中追地区「るんるん若ガエル体操」の支援ができるように、いの町ほけん課地域支援事業（地域介護予防活動支援事業）「るんるん若ガエル教室応援サポーター養成講座」を、６名の職員が受講する。

【活動の内容】・・・催事

年２回の祭りには近隣の市町村からも
参加してくれる
（もみじ祭りの地元青年の清流太鼓）



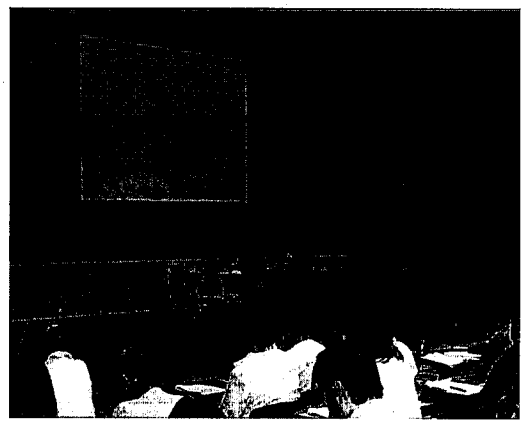
夏休み最後の日曜日にも関わらず
「子供釣り大会」には多くの親子連れで
賑わう



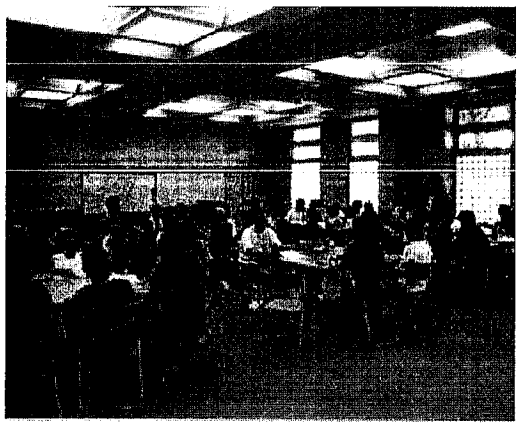
毎年８月の開設記念日
職員がつくる「鰹のたたき」や「手づくりコロッケ」「ちらし寿司」で地域住民や利用者、
家族をもてなす

【活動の内容】・・・地域の人達との交流

運営推進委員会を開き、意見交換する
地域住民代表、消防署、民生委員、
行政（介護福祉課）等が参加



取り組みの結果や過程を県内外のセミナー
や大会に積極的に参加して発表を行っている



いの町ほけん課地域支援事業の
「るんるん若ガエル教室応援サポーター養成講座」
に職員が参加
（いの町すこやかセンター）

４．活動の成果と今後の展望

＜福寿の家が目指すもの＞

年に２回の「祭り」も定着し、地元住民の方より「祭りを楽しみにしている」との声も聞かれる様になる。

小学校主催グラウンドゴルフへの参加も、早１年経過する。地域住民のチームに入居者のみ入り、コースを回る姿も見られ、すっかり馴染みの関係ができている。小学校の愛校作業への参加や校長先生の交代による、離任・就任の懇親会へ参加の声掛けが小学校児童の父兄より掛かるようになり、交流の機会も増えてくる。

「やすらぎの会」開催の「るんるん若ガエル体操教室」への参加も、最初は戸惑いも見られたが、１０ヵ月を経過した現在、地域交流の中で自然に言葉を交わす、地域住民の方と入居者・職員の姿が見られる。

交流を機会に、勝賀瀬地区公民館で「認知症サポーター養成講座」を開催、６２名のサポーターが誕生する。

開設当初より参加している小学校・地区民運動会では、職員が付き添うことでほとんどのプログラムに参加する。また、職員も地域の一員としてプログラムに参加し、楽しんでいる。

新聞受けを置かして頂いている、勝賀瀬地区入り口の地元住民の方は、四季の花や野菜を施設の方に喜んで頂ければと、時々置いて下さっている。

地域住民の理解の元、２つの地区との交流も確かなものとなる。

今後、地域の方の駆け込み寺となれるよう交流を続けて行きたい。

中追地区の「るんるん若ガエル体操教室」導入から自主継続の手助けと、地域に必要とされる施設作りの第一歩を歩み始める。

いの町ほけん課地域支援事業（地域介護予防活動支援事業）「るんるん若ガエル教室応援サポーター養成講座」のフォローアップ研修として、「認知症サポーター養成講座」開催の相談もある。

地域密着型サービス事業所の利点として、地域に出向き受け入れて頂くことで、地域が見えてくる。行政では担いきれない部分を手助けしたり、行政で把握できていない地域の現状を伝える役割もある。行政との協働もしやすい位置づけにある。

各グループホームが、認知症に対する啓蒙活動を地域に向けて実践したならば、より多くの方に認知症について理解して頂く事ができる。

行政もまた、地域密着型サービス事業所の役割を上手く利用し、地域の情報源としてほしい。

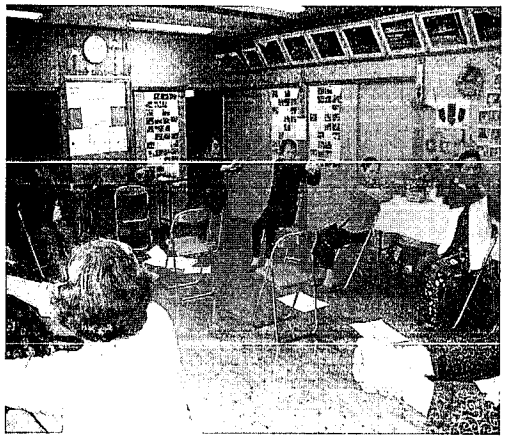
今後も、福寿の家のケアや地域交流等の実践を、対外的に発表することで、ケアや地域交流の実践を検証する機会とし、常に進化するケアを目指したい。

【活動の成果】

「認知症サポーター養成講座」

地域住民５４名が参加

認知症への偏見を取り除き理解を深める



恒例参加となった
「るんるん若ガエル体操」

今では地域の方と名前で呼び合う仲に
なっている

中追地区の敬老会に参加

中には顔見知りの地域の方も・・・

【活動の成果】

小学校・地区民運動会

日々の交流で馴染みも増えて戸惑いもなく
プログラムに参加している

親しかった前校長先生と再会

はっきりと覚えていて自然と歩み寄る

お互いの健康を気遣う

職員も積極的に参加

若い職員の見せ場「マスト登り」

このあと息絶え絶えになる

【活動の成果】

勝賀瀬小学校の麦刈りのお手伝い

子供たちが大切に育てた麦畑

先生の説明に耳を傾ける

昔取った杵柄で、力を発揮する

入居者の経験が子供たちを助ける

先生も見事な手さばきに感心する

活動報告(3)

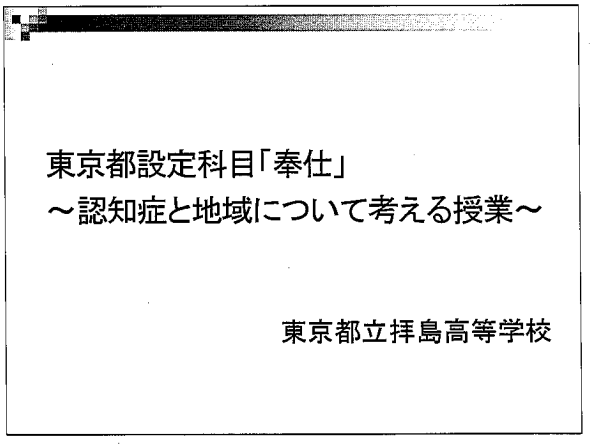
活動名称	教科　奉仕　「認知症と地域について考える」授業
活動要旨	平成１９年度から実施の都立高校の指定科目、教科「奉仕」において、認知症の方の隣人として暮らすための学びを実施。映画鑑賞、サポーター養成講座、ＳＰＳＤ（認知症模擬演技者）演習、等で構成。自分たちなりに向き合う姿勢が芽生えてきている
応募者	東京都立拝島高等学校　　「総合的な学習の時間」委員会担当　手塚比目古
連絡先	〒196-0002　東京都昭島市拝島町 4-13-1

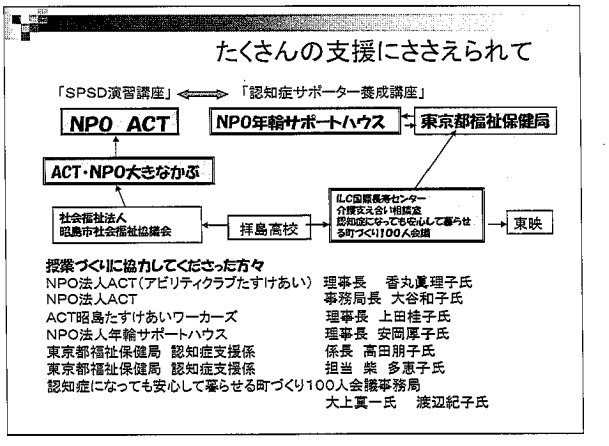
1)推薦理由

- 社会の中で活動の領域を広げていく年代である高校生に、授業として認知症の理解をはかり、実践的な知識と具体的な体験の機会を提供している点がすばらしい。
- 授業を受けた学生たちの意識の変化が明確にとらえられており、学生が今後、地域の中で様々な波及効果を生み出してくれる期待が持てる。
- きめ細かいプログラムが他の参考となり、全国の学校で取り組むことが可能なモデルである。ぜひ各地で取り組んでほしい。
- 授業の担当教員のみが企画するのではなく、キャラバンメイト、行政、ＮＰＯ等と連携しながら、継続的した活動にむけて組織的な取り組みをしている。

2)3月1日キャンペーン発表会　発表資料

町づくりキャンペーンホームページからダウンロードができます。





「認知症」をテーマにした授業プログラム

時期	内　　容	時間数
7月	事前学習①　映画「明日の記憶」	3時限
9月	「認知症サポーター養成講座」	2時限
	事前学習②　DVD「SPSD演習」	1時限
10月	「SPSD（認知症模擬演技者）による演習講座」　＋DVD「共に生きる」	2時限
	事後学習　DVD「町で暮らす」 「認知症本人会議アピール」 資料「認知症の本人の思いを聴こう ～本人は思いを伝えている～」	1時限

映画「明日の記憶」を見て

- 認知症になったとか聞いたら絶対パニくると思う。本人もめっちゃつらいと思うケド…。奥さんとか、恋人、家族や周りの人もかなりつらいと思った。
- 自分もこれから認知症になるかもしれない。自分の周りの人が認知症になったら悲しいと思った。

「認知症サポーター養成講座」９月28日（金）

講師：安岡　厚子　先生

ボケてるからもう遅いと思った。あまり近づきたくない。本人も大変だが周囲も大変そう。

介護してあげるじゃなくて、杖になってあげる。サポートしてあげれば普通に生活することもできるんだなって思った。

設　　問	Yes↓Yes	Yes↓No	No↓Yes	No↓No	合計
①認知症の症状は対応や環境によって変化しない。	19	24	11	158	212
②認知症のものの忘れは、今のことは比較的覚えているが昔のことは覚えていられない。	54	37	14	113	218
③認知症は治らないので早期受診するのは意味がない。	37	30	7	141	215
④何度も同じことを言ったりするときには時々たしなめたり、怒ったりすることが効果的である。	13	44	3	152	212
⑤認知症の人は自分の「ものの忘れ」に初期には気づいていない。	63	102	7	43	215

あなたの仕事や日常の暮らしの中で、これまで認知症の人と思われる人との関わりや、サポーターとしての知識が役立つ場面があると思いますか。

回答「ある」＝78

- 今日聞いた全てのこと（が役立つ）。 困っている人がいたら、言葉づかいなどを気をつけられる。 公共の場などで。
- 人のことをもっとわかってあげられる。 近くに認知症の人がいるとき。近所にいるような気がする。道ばたとかで。いろんなとこで。

「SPSD（認知症模擬演技者）による演習講座」

NPO法人アビリティクラブたすけあい

NPO法人ACT昭島わーかーず大きなかぶ

10/5、10/12、10/26（金）

- できるかぎり、自分も働いている立場で、声かけられた時は、安心させてあげることと、わかりやすく話してあげる。＆聞いてあげる。
- 最後のDVDを見て、認知症にもかかわらず、笑顔はすてきだなって思った。

今後の展望と課題

熱しやすく冷めやすいのが若さだからこそ…

- 実際の場面に遭遇しても慌てずに、対処できる勇気。
- 学校外で、アルバイト先で、オレンジリングをきっかけに拡げたい、心の輪。
- 学校内で、先輩から後輩へ。「サポーター講座？あ、俺も去年やったよ。」

3)キャンペーン応募資料(全)

1．概　要

平成１９年度から都立高校の「東京都指定科目」として教科「奉仕」が各校で実施されています。

地域でのボランティア活動や小中学生を招いての部活動指導など、実施の仕方は各校で工夫されていますが、本校では、同じ地域に生活していても、出会ったりその存在を認識したりする機会のなかなかない、視覚障害者や認知症の方について、理解を深め、隣人として暮らすにはどうしたらよいか、学ぶことを中心に「奉仕」の授業を進めていくことになりました。

１学期は視覚障害者の講演や、交流、点字の学習などを行い、１学期末から認知症についての授業を何段階かに分けて行いました。

準備の段階では、「認知症サポーター養成講座」についての情報が最初にあったので、まずそこから考えてみようということになりました。「奉仕」の進め方について、昭島市社会福祉協議会の方々が相談に乗って下さっていたのですが、「サポーター養成講座」を受講した方が、市内のＮＰＯ法人「大きなかぶ」を紹介して下さいました。「大きなかぶ」を介して、ＮＰＯ法人アビリティクラブたすけあいの「ＳＰＳＤ（認知症模擬演技者）演習講座」も行っていただけることになり、８月末には教員向けの「ＳＰＳＤ演習講座」を実施していただきながら、高校生向けのプログラムのためのやりとりとなりました。授業の内容と順序は次のとおりです。

1)事前学習①　映画「明日の記憶」鑑賞(7/13　金　5･6時限、7/16　月　LHRで感想記入)

2)「認知症サポーター養成講座」実施(9/28　金　5･6時限)

3)事前学習②　DVD「SPSD演習」(アビリティクラブたすけあいから借用)を視聴、
認知症と、認知症模擬演技者の対応について、予備知識を得る。
(9/14　金　に実施予定だったが台風のため休校となり延期)

4)「SPSD(認知症模擬演技者)による演習講座」(NPO法人アビリティクラブたすけあい、
NPO法人ACT昭島わーかーず大きなかぶ)
(10/5、10/12、10/26　金　5･6時限、各日2～3学級ずつ、HR単位で実施)
※この授業の最後にDVD「共に生きる」を視聴

5)事後学習　DVD「町で暮らす」、「認知症本人会議アピール」の視聴、
「認知症サポーター養成講座」でテキストに使用した「認知症の本人の思いを聴こう～本人は思いを伝えている～」を再度読み直し、ワークシートに記入、最後に「自分たちができること」について生徒に自由意見を書かせる(10/26以降、「SPSD演習講座」の終わったクラスから実施。)

「認知症」という言葉すらなじみのない高校１年生が、映画を「奥さんの名前まで忘れちゃうんだ」と涙を流しながら見ていました。それでも、この段階では、「認知症」はまだまだ、映画の中のかわいそうな病気、「世界の中心で愛を叫ぶ」と同じように、「なったら恐い、自分はなりたくない」ものでした。

「認知症サポーター養成講座」で、「認知症」の中核症状や、若い人でもなりうるありふれた病気だということを知り、少しずつ印象が変わっていったようです。特に、「認知症に一番最初に気づき、その症状について一番悩んでいるのは本人だ」ということに、とてもショックを受けたようでしたが、ビデオの中の大人たちのように、自分たちもちゃんと「認知症」の人に出会ったら向き合いたい、自分にできることを何かしたい、周りがみんなで支えれば大丈夫なんだというように考えるようになっていきました。

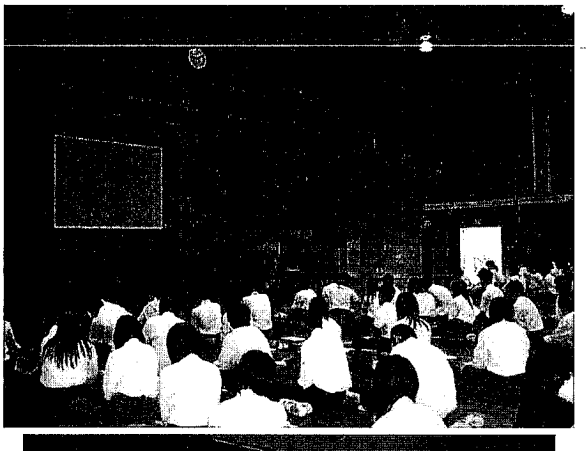
「ＳＰＳＤ演習講座」では、担任の先生がまずショートコントで、朝でかけようとすると「どこ

に行くの？」と繰り返し尋ねる、認知症初期の母親との対話を演じて見せ、それぞれの気持ちを語ります。次に、コンビニにマッチを買いに来た認知症のおばあさんと店員、公園で迷子になってしまった認知症のおばあさんと二人の高校生のロールプレイを、生徒が演じ、それぞれの気持ちと、他の生徒の気持ちをやりとりしました。

実際にやってみると、認知症の人の焦りがこちらに伝染してしまったり、繰り返し繰り返し自分に迫ってくるように見えるのが恐く感じられたり、と戸惑うことも多くあったようですが、自分たちなりになんとか向き合って対応しよう、勇気が必要だがなんとか頑張っていきたい、という思いを強くしたようです。

いろいろなスタッフの方々とこの授業の計画を立ていく時に、「自分がああじゃなくてよかった」「自分はなりたくない」という到達点ではないところに、どうやったらたどり着けるだろうということが何度か話題に上りました。二つの「講座」を終え、生徒達は「学んだことがきっと活かせる時が来るはず」「認知症の人に出会ったら学んだことを生かして対応したい」と、自分自身のこととして受けとめていると思います。

もちろん、そうした直接の生かし方は大事で、ぜひ頑張ってほしいのですが、もっと簡単なことでも役に立つことはできるんだよ、ということを事後学習の中でつかんでほしいと思っています。「本人会議」のリーフレットをもう一度読ませたいのは、「このチラシをコピーして、～大切な支援者のひとりです。」という部分に気づいてほしいからです。彼らにできること、オレンジリングを誰かに「それ何？」って聞かれたら、話してあげられること。「そういう人には、早口でいろいろしゃべっちゃいけないんだよ」「安心させてあげなくちゃいけないんだよ」と、一言でもいいから、他の人に広めていってほしいと願っているのです。



（左）９月２８日（金）本校体育館
「認知症サポーター養成講座」
講師：安岡　厚子　先生

（下２点）１０月５日（金）
１年２組「ＳＰＳＤ演習講座」

２．地域の紹介

東京都立拝島高校のプロフィール

全日制普通科高等学校　生徒数　１学年　２３４名、２学年　２２１名、３学年　２１９名。

４０人学級×１８クラス（各学年６クラス）規模の学校ですが、以前は中退者がとても多かったため「中途退学者対応加配」措置を受け、１学年は７クラス（１クラス３４人）で生活しています。

以前は学校内が荒れていた時期もありましたが、この数年は「温かく厳しい指導」という方針のもと、きめ細かい生徒指導や、少人数クラスでの学習指導を行ってきた成果もあり、とても落ち着いた雰囲気になっています。生徒も、優しくおとなしい子が多くなってきました。

進路先は、専門学校進学が多く、大学短大進学が２割、就職が３割ほどです。美容や保育、調理などの職業を希望しているほか、就職先では販売・接客、製造が多くなっています。中には、看護や介護、福祉の分野を志望している者もいます。

部活動も盛んになってきましたが、経済的な理由（毎日の費用は自分でまかなう。親から小遣いをもらっていない。）でアルバイトをする生徒が多数です。主に、コンビニ、スーパー、ファミリーレストラン、ファーストフードショップなどで働いています。

通学域は、昭島市、福生市、立川市、武蔵村山市、東大和市、あきる野市からの生徒が多く、八王子市や日野市からの入学も増えています。府中市、国立市、小平市他の市からもそれぞれ数人ずつ毎年入学しています。

地元の昭島市からあきる野市、日の出町にかけては、老人ホームやケアハウスが多い地域で、保護者の中にもヘルパーなど介護職に就いている方も見られます。

アルバイト先や、自分の家の周りで、「認知症」の人に出会う可能性は低くなく、これまでは気づかなかったかもしれないその存在に、これからは気づき、また勇気を出して声をかけられるようになってほしいと思っています。

３．活動の内容

授業づくりに協力してくださった方々

ＮＰＯ法人ＡＣＴ　理事長　香丸眞理子、事務局長　大谷和子

ＡＣＴ昭島たすけあいワーカーズ　理事長　上田桂子

ＮＰＯ法人年輪サポートハウス　理事長　安岡厚子

東京都福祉保健局　認知症支援係　係長　高田朋子、担当　柴　多恵子

認知症になっても安心して暮らせる町づくり１００人会議事務局　大上真一、渡辺紀子

１）事前学習①　映画「明日の記憶」鑑賞（7/１３金５・６時限、7/１６月ＬＨＲで感想記入）

２）「認知症サポーター養成講座」実施（9/２８金５・６時限）

講師：安岡　厚子　先生　　時間９０分

使用教材：認知症サポーター養成講座「認知症を学び地域で支えよう」

補助教材として講師の用意した資料

「認知症サポーター１００万人キャラバン」キャンペーンビデオ

概要：６５歳以上の人口の１割が認知症、その半数（東京都は７０％）が在宅で地域に暮らしている。高齢者だけでなく、壮年期に発症する若年性認知症もある。認知症に最初に気付き、苦悩するのは本人であり、それぞれが人として普通に暮らしていきたいと願っている。「特殊なかわいそうな人」ではなく、少しの不便を抱えた隣人として私たちはどう接すればいいかを考える。

※受講前と後でアンケートを実施　※終了後、講座受講者にオレンジリングが渡される

※都立高校の生徒を対象に実施するのは初めての取り組み

３）事前学習②　ＤＶＤ「ＳＰＳＤ演習」（アビリティクラブたすけあいから借用）を視聴、認知症と認知症模擬演技者の対応について、予備知識を得る。

（9/１４金に実施予定だったが台風のため休校となり延期）

４）「ＳＰＳＤ（認知症模擬演技者）による演習講座」（ＮＰＯ法人アビリティクラブたすけあい、ＮＰＯ法人ＡＣＴ昭島わーかーず大きなかぶ）

（１０/５、１０/１２、１０/２６金５・６時限、各日２～３学級ずつ、ＨＲ単位で実施）

講師：１ＨＲに２～３人配置（演技者２人、ファシリテータ１人）、時間１００～１１０分

概要：認知症模擬演技役の講師と生徒とで実際の接し方を考えていく、参加型ロールプレイ演習。導入ビデオを見たあと、ロールプレイ。

＝具体的な事例（２例）について、「どうしたらよいか」考え、やってみて「どうだったか」「こうしたらよかったのではないか」「こうしたところがよかった」などお互いに評価しあい、演技者自身が「どう感じたか」を表明する。

留意点：教室の設営　机を全部教室後方に寄せ、教室前方を１／３演技用のスペースとして空け、椅子のみを配置しＲＰを行う。※この授業の最後にＤＶＤ「共に生きる」を視聴

５）事後学習　ＤＶＤ「町で暮らす」、「認知症本人会議アピール」の視聴、「認知症サポーター養成講座」でテキストに使用した「認知症の本人の思いを聴こう～本人は思いを伝えている～」を再度読み直し、ワークシートに記入、最後に「自分たちができること」について生徒に自由意見を書かせる。（１０/２６以降、「ＳＰＳＤ演習講座」の終わったクラスから実施。）

拝島高校　認知症の理解(プログラム)
あなたの暮らしている地域で認知症の人とであったら

時間	授業内容	教室・生徒の状況
13:20 ～	1．導入　（30分） ・自己紹介：進行役のファシリテーター・ＳＰＳＤ各自 （介護の現場で働いていることも話す。） ※「みんなで、一緒に考える授業です！」をつたえる。 ・今日の授業の目的･･･認知症の人が安心できる 関わりと環境を理解する ※黒板に板書 ・体験ビデオを見よう！（10分） ･･･感想を2～3人から聞く！ ・復習･･･認知症を理解する･･･資料に基づき説明(10分)	・生徒は名札を付ける。 ・机は後ろに下げ、椅子だけ持ってSPSDを囲むようにUの字になる。 ・体験ビデオを見る ※ファシリテーターの合図で先生がビデオ（約9分）を操作する。 ・テキストで説明
13:50 ～	2．事例を行なう <デモ･･･何回も繰り返す>　20分 ・ロールプレイの手法の説明（よくある場面で実演） ①担任の先生の協力で今からやろうとしている ロールプレイを理解してもらう。 ②シートの書き方の説明 ③デモを行なう。先生⇒ＳＰＳＤの順でコメントを聞く。 ・事例の関わる生徒を選ぶ コンビニ･･･1名（　　） 公園･･･2名（　　） ・今日の川上良子さんのプロフィールの説明	・先生が登場することで場を和らげる。（ショートコント） ・教室からロールプレイに参加したい人を募る。 <良子さんのプロフィール> アルツハイマー中期、娘が近所に住む ・出来るだけみんなに意見を聞く。 ・ＳＰＳＤは、できるだけ良いところを評価する。また、こうするともっと良かったと感じたことを分かりやすく話す。
14:10 休憩	･･･休憩10分･･･	
14:20 ～	<事例1･･･コンビニ>17分 ・ロールプレイ（3分） ・関わった生徒の感想 ・ＳＰＳＤの感想 ・周りの生徒の感想 ＊　シートにメモは随時行なうよう促す。 まとめ　2分 <事例2･･･公園>　17分 事例1同様に行なう	 先生に手伝ってもらい、 模造紙にポストイットを分類しながら貼り付ける。 <ポイント>
14:37 ～	3．自分ができること、できるといいなと思うこと、感じたことを書く。（10分）（イラストでもいいよ！） ・シートを使って記入（3分） ポストイットにも書いてもらう！⇒模造紙に張る。 ・認知症の人へのかかわりのポイントをあげまとめにする。 ⇒授業の目的である認知の人が安心できる関わりと環境を生徒の意見から拾い上げまとめにする！	・感情は豊かで、手助けがあれば充分生活できる。 ・認知症の人が安心できる関わりと環境を作ることを心がけることを理解してもらう。 ・後日、感想のまとめを配布 （先生がまとめを行ない、ＡＣＴへ送付する。）
14:55 ～ 15:10	4．ＤＶＤで認知症の人にいきいきした姿をみる（5分） ・・・・老いのくらしＤＶＤを映す・・・ 5．4のシートを回収する。　<終了>	

川上良子さんのプロフィール

- アルツハイマー型認知症　中期
- ひとり暮らしで、近所に娘家族が住んでいる。
- 最近、火の始末が心配なので、ガスの元栓を閉められている。
- コンビニにマッチを買いにいくが、コンビにはマッチは置いていない。
- 昭島市拝島町に長年暮らしている。

【場面１】　コンビニで何か困っていそうな認知症の人をみかけたら

- おばあさんがお店に挨拶しながら入ってくる。しばらく店内をうろうろしながら、困った様子で何か探しものをしている。
- さあ、あなたはどのように声をかけますか？声をかけてください。

※ＳＰＳＤポイント　　ガスがつかなくて、ご飯が炊けないのよ！

【場面２】公園のベンチにすわっていたら声をかけられた。

- 高校生２人で、公園のベンチに座って携帯電話をいじりながら話をしている。
- そこへ、知らないおばあさんが、高校生の２人に話しかける。
- 「わたしのうち知らんかね」
- さあ、あなたは、どうしますか？

ロールプレイを見て『気づき』メモ　拝島高校：　　年　　組

氏　名

	ショートコント	場面１（コンビニ）	場面２（公園）
見ている自分の気づき	自分：ちょっとお母さんがかわいそう！		
認知症の人に関わった生徒の気づき	先生：何度も同じことを聞かないでくれ、急がしいのに…		
模擬演技者の気づき	母親：何かとってもいらいらしていて、いつもの息子ではない。もっとやさしくし欲しい。		
教室からの気づき			

自分ができること、できるといいなと思うこと、感じたこと！（イラストでもいいよ！）

授業の評価：①大変良かった　②良かった　③よく分からなかった
＜感想＞

「奉仕」第10～12回 認知症を理解し、できることを考えるプログラム

07.10.12

1年（　　）組（　　）番氏名（　　）

1 DVD「町で生きる」を見て思ったこと。

2 DVD「本人会議アピール」を見て思ったこと。

3「サポーター養成講座」のテキスト「認知症の本人の思いを聴こう」を読み、考えてみよう。

Q1「本人会議」とは？

（ア　　）の人同士が集まり、お互いの（イ　　）や（ウ　　）を話し合う会議が（エ　　）で開催されました。

（オ　　）人の人が発言をしましたが、会議での生の言葉を元に、参加者同士で話し合って社会への（カ　　）を決めました。

Q2「本人会議アピール」の内容から

（キ　　）の声を大切に、互いが（ク　　）町を一緒に築いていきましょう。

認知症であることをわかってください

どんなことを？

（シ　　）か。

（ス　　）か。

早く（セ　　）し、いい（ソ　　）が早く必要です。

自分たちの意向を施策に反映してほしい

どんなこと？

（ト　　）サービス。

（ナ　　）つづけ、

（ニ　　）を得る機会がほしい。

（ヌ　　）を楽にしてほしい。

本人同士で話し合う場を作りたい

どうして？

仲間と（ケ　　）て進みたい。

（コ　　）したい。

仲間の役に立ち、（サ　　）たい。

わたしたちのこころを聴いてください

どんなことを？

（タ　　）。

（チ　　）。

（ツ　　）と決めつけないで。

（テ　　）まず、

わたしたちにきいてほしい。

Q3 裏面を読んで考えよう。

サポーターが増えたらどんないいことがあるだろう？

わたしたちにできることは何かないだろうか？（チラシをよぉ～く読んでね）

4．活動の成果と今後の展望

活動の成果

1）映画「明日の記憶」を見ての感想（多数意見抜粋）

認知症になったとか聞いたら絶対パニくると思う。本人もめっちゃつらいと思うケド…。奥さんとか、恋人、家族や周りの人もかなりつらいと思った。

すごい感動した。認知症は、大変な病気だと思った。自分もつらいし、世話をしてる人も大変だと思う。

怖かった…。今までの記憶や、した事など忘れちゃうなんて…。『かわいそう』なんて、言葉にしたり、思ったりするのめっちゃ最低だと思うけど…。でも、かわいそうって思ってしまいます…。アルツハイマーの、『TeddyBear』の事を思い出して…、なんか泣けてきます。

最初は普通の社員がだんだんいろんなことを忘れるということはとても恐ろしいです。もし自分がなったらと考えてしまうととても大変です。

認知症はとても怖い病気だと思いました。大切なことだけはせめて覚えたいと思いました。

最後に奥さんのことまで忘れてしまったのは、かわいそうだと思った。

もし自分の家族もあんな風になったら、この映画のようにみんなで力を合わせたいと思いました。

自分の妻もいずれ忘れてしまうのを見て、相手もつらいし、自分もつらいから本当に悲しい病気だなと思った。

認知症になった本人も大変だけど、その家族も大変だと思いました。

自分もこれから認知症になるかもしれない。自分の周りの人が認知症になったら悲しいと思った。

主人公の男の人の会社の周りの人たちが、認知症と知っても、前と変わらず、主人公の人を慕っていたところに感動しました。認知症になった本人が一番悲しいし、家族も悲しいんだなと思いました。認知症の人がいたら、そのことを思っていきたいと思いました。認知症の人を支える人になりたいと思いました。

認知症のこわさとは、前までに普通に健康だった人が急に物忘れやさっきやったことが忘れてわからなくなってしまうのがすごくびっくりでした。そして、認知症は誰でもなってしまうのもびっくりしました。

あの人の演技力は本物だ。認知症がどれほど苦しいことなのかわかった。あと先くらい人生がある中で、どうゆう風に生きていくか考えさせられた。そんな中で家族・友達の大切さなどがあった。認知症にはならないように気をつけよう。

かなり認知症はこわいと思った。なりたくないと思った。

かわいそう。

認知症はいろんなことを忘れてしまうだけではなく、忘れたことにすら気づけない悲しいものだと思った。

2）「認知症サポーター養成講座」受講後のアンケート

Q１　次の設問に答えてみてください。（受講前＆受講後）

設　　問	Yes↓Yes	Yes↓No	No↓Yes	No↓No	合計
①認知症の症状は対応や環境によって変化しない。	19	**24**	11	**158**	212
②認知症のもの忘れは、今のことは比較的覚えているが昔のことは覚えていられない。	54	**37**	14	**113**	218
③認知症は治らないので早期受診するのは意味がない。	37	**30**	7	**141**	215
④何度も同じことを言ったりするときには時々たしなめたり、怒ったりすることが効果的である。	13	**44**	3	**152**	212
⑤認知症の人は自分の「もの忘れ」に初期には気づいていない。	63	**102**	7	**43**	215

Q２　受講前の認知症に対するイメージを自由にお書き下さい。

物忘れが激しい。ついさっきのことをする。変なことをする。何もかも忘れてしまう。なんか子どもっぽくなるというか。あまりしゃべらなくなって物忘れが激しい。かわいそう。ぼーっとしてる。治る方法がない。買い物に行こうと思っても買うものを忘れてしまって何も買うことができなそう。同じことを何度も言う。

性格が少し変わりそう。普段普通にできることが出来なくなってくる。周りのことが認識できなくなる。怖い。どこか障害がある。普通の人とは少し違う。自分の思っていることができない。ボケだと思う。老人がなりそう。昨日食べたものが思い出せない。不自由。理解しがたいことを発言する(意味が分からない)。質問に対して的が外れた答えをする。友達や家族のこともすぐ忘れて思い出せなくなる。相手をするのが大変そう。暗いイメージ。ボケてるからもう遅いと思った。あまり近づきたくない。本人も大変だが周囲も大変そう。病気。障害。なりたくない。老人ホームにいるような人がかかるもの。子どもの頃の記憶とまざってしまう。

Q３　受講後の認知症に対するイメージを自由にお書き下さい。

認知症の人にも意志や、意識がある。プライドもあったり、皆と一緒だなと思う。本人が一番つらいんだとわかった。それぞれの思いがちゃんとあるんだって思った。ちょっとした障害を持っているだけで、自分とあまり変わらないんだって思った。重い病気。誰もがなりうるありふれた病気、少し怖い。人によっては普通に生活できることを知ってイメージが軽くなった。つらいんだって思った。かわいそう。みんななる可能性があるもので、だから別にその人がおかしくなるものではないともわかった。介護してあげるじゃなくて、杖になってあげる。サポートしてあげれば普通に生活することもできるんだなって思った。周りが対応を変えるべき。早口ではなくゆっくり説明してあげれば、できる。最初からそんなに物忘れが激しいわけじゃないし、ひとそれぞれだということがわかった。周りの人が手伝ってあげることが必要。ちゃんとした接し方をしなくちゃいけないんだなと思った。いろいろな症状がある。確かに他の人と違う所はあるけれど、ほとんどみんなといっしょ。認知症の薬が開発されている。誰でも認知症の人を助けてあげられるんだとわかった。受講前は明るく元気に生きようとしているというイメージがなかったけど、受講後はそのようなイメージを持った。人なんだからちゃんと接しなければいけないと思った。助けてあげるというイメージでなく、支えてあげるというイメージを持った。忘れていってしまうが周りの環境で変わるものだと思った。

Q４　イメージは変わりましたか。

大きく変わった	変わった	あまり変わらない	変わらない	合計
21	125	52	20	218

Q５　あなたの仕事や日常の暮らしの中で、これまで認知症の人と思われる人との関わりや、サポーターとしての知識が役立つ場面があると思いますか。　回答「ある」＝７８

「ある」＝具体的にどのように？どんな場合に？(全回答掲載)
自分の親や、将来に役立つ。「おじさんが認知症なのでこれから役立てたいです。」 自分のおばあさんと接する時。おじいちゃん。 知り合いの認知症の人に対して言葉づかいに気をつけることができる。
周囲の人が認知症になった場合。 自分の家族がこれから発病したりする可能性もあると思うから。 親など身近な人に可能性があるから。 親がぼけたとき。 親や自分がなる可能性がある。　どんな強い人でも支えは必要だ。 高齢者の方と接するときなど。 家で家族の介護をしているとき。
(認知症の人への)言い方。 やさしく声をかける。　自分のできる範囲で(福祉の仕事がしたいので)。
将来介護の仕事がしたいので、勉強になりました。 認知症の人のことをよく考えて行動する。 手をさしのべることはできる。 これから働く職場や、自分の知り合い、家族がなってしまった場合。 周りの人がそうなった時に対処できる。
もし親や周りの人が認知症になっても、対処のしかたがわかったから役立つと思う。 おじいちゃんおばあちゃんなど。 もし身内の中で認知症になった人がいた場合、知識があれば適切に対応できる。
自分がもしそういう人に会ったとき、今日教わったことを使えるから。 それなりの対応ができると思う。 普通に接する。　今日聞いた全てのこと (が役立つ)。
困っている人がいたら、言葉づかいなどを気をつけられる。公共の場などで。
人のことをもっとわかってあげられる。 近くに認知症の人がいるとき。近所にいるような気がする。
道ばたとかで。いろんなとこで。 認知症の人が困っているとき。 町で会って困っている所を見たとき。
迷子になっている人がいたりしたら声をかけてあげる。
私の住んでる団地が老人がいっぱいだから、エレベーターでお話するとき。 道で会った時とかに話しか

けてあげられる。道に迷っているような人をビデオでみたような接し方で接する。 道を尋ねられた時等。困っていたら丁寧に聞こうと思う。 困っている人がいたら優しく接することができる。
バイト先や身内の人との関わりが増えてくると思うから、このプリントなどを見て対応しようと思った。 バイトのレジでの対応。 老人ホーム(認知症の方もいらっしゃった)に行った時。 私はコンビニのバイトをしているので、お客さんとして来られてもおかしくないと思います。なので、そのような場面になっても嫌な顔などをせず優しく接したいと思います。 具体的に説明できませんが必ずあると思います。
まだ認知症のことを知らない人がたくさんいるのでサポーターの人がいれば生活が普通にできると思う。

3)「ＳＰＳＤ演習講座」ロールプレイ「気づき」メモ（１０月５日実施３クラス分）

	①大変良かった	②良かった	③よく分からなかった	無回答
合計	51	35	0	12

自分でできること、できるといいなと思うこと、感じたこと！（多数意見抜粋）

自分の周りには認知症の人は居ないケド、今回のロールプレイのようなことがあったら、できるだけ優しく接してあげたいと思った。
やさしくする。早口で話さない。普通の人みたいに生活できるんだなと思った。
困っていたら一言でも声をかけてあげたい。　優しくする。相手につくす。ちゃんと向き合う。
できるかぎり、自分も働いている立場で、声かけられた時は、安心させてあげることと、わかりやすく話してあげる。&聞いてあげる。
ちゃんと接してあげられるようになったらいいと思った。
相手の話をよく聞いたり、自分が助けられることはなるべくやっていきたいと思う。
極力、親身になって協力してあげたい。出来る限り、その人のしたい事に近づけるようにする。
なるべくいろんな事きいて助けてあげたい。少しでも力になりたい。
自分ができる範囲でなら全力を尽くして対応したいと思う。
ここ2回の授業と今日で学んだことを生かして行けば、自分のできることは沢山あると思う。あとは自分の勇気が一番必要だと思う。もし自分も認知症にかかってしまったら困ることを考えれば、人にやさしくできることは簡単だと思う。
何を聞かれてもすぐ対応できるようになったら、自分のためにもいいなと思いました。最低でもきょうやったことを他の日に役立てたいです。
こんな場面に遭遇したくないなと思いました。　困ってたら話をかけてみる。落ち着いて話す。
自分ができるささいな事ぐらいは助けてあげたいと思う。
落ち着く。　やさしくする。　助ける。　もっと優しくできたと思う。

感想

体験とかもあって、スゴくべんきょーになった。　眠かったけど勉強になった。
最後に見たDVDはとても感動しました。またこうゆう授業をやってほしい。
あまり学校では習えないことを教えてもらいました。
最後のTVを見て、認知症にもかかわらず、笑顔はすてきだなって思った。
難しい仕事だと思った。でもすばらしい仕事なので気になります。
すごく大変だと思う。でもすごくいい仕事。　参加できてよかった。
認知症の人が意外といろいろなことに気づいているんだなぁと思った。
身近に認知症を感じることができた。優しい心を持った人達が来て、うれしかった。
来た人が最後の方に、「認知症の人っておもしろいよね」って言ったことが心に残る。分かる人には分かる。授業的には悪くはないと思った。この学んだことを活かせる時がいつかくると思う。
認知症の症状が詳しくわかって良かったと思いました。
将来介護の仕事につきたいので、とてもよい勉強になりました。親がヘルパーさんで認知症の人の話をよく聞いていたので、もっと理解が出来ました。
認知症は不幸なことではない。認知症の人も周りの人もいろいろ学べて得ることができると思う。

「認知症」という言葉すらなじみのない高校１年生が、映画を「奥さんの名前まで忘れちゃうんだ」と涙を流しながら見ていました。それでも、この段階では、「認知症」はまだまだ、映画の中のかわいそうな病気、「世界の中心で愛を叫ぶ」と同じように、「なったら恐い、自分はなりたくない」ものでした。

「認知症サポーター養成講座」で、「認知症」の中核症状や、若い人でもなりうるありふれた病気だということを知り、少しずつ印象が変わっていったようです。特に、「認知症に一番最初に気づき、その症状について一番悩んでいるのは本人だ」ということに、とてもショックを受けたようでしたが、ビデオの中の大人達のように、自分たちもちゃんと「認知症」の人に出会ったら向き合いたい、自分にできることを何かしたい、周りがみんなで支えれば大丈夫なんだというように考えるようになっていきました。

「ＳＰＳＤ演習講座」では、担任の先生がまずショートコントで、朝でかけようとすると「どこに行くの？」と繰り返し尋ねる、認知症初期の母親との対話を演じて見せ、それぞれの気持ちを語ります。次に、コンビニにマッチを買いに来た認知症のおばあさんと店員、公園で迷子になってしまった認知症のおばあさんと二人の高校生のロールプレイを、生徒が演じ、それぞれの気持ちと、他の生徒の気持ちをやりとりしました。実際にやってみると、認知症の人の焦りがこちらに伝染してしまったり、繰り返し繰り返し自分に迫ってくるように見えるのが恐く感じられたり、と戸惑うことも多くあったようですが、自分たちなりになんとか向き合って対応しよう、勇気が必要だがなんとか頑張っていきたい、という思いを強くしたようです。

今後の展望と課題

コンビニやファミリーレストランのアルバイト先や、自分の家族や隣人など、日常の生活の中で認知症の人にあったら（きっと会うだろうと生徒は考えています）、学んだことを生かして頑張りたいという気持ちを生徒が持ってくれたことはとても嬉しいことです。

もちろん、そうした直接の生かし方は大事で、ぜひ頑張ってほしいのですが、もっと簡単なことでも役に立つことはできるんだよ、ということを、今回はまとめられなかった事後学習の中でつかんでほしいと思っています。「本人会議」のリーフレットをもう一度読ませたいのは、「このチラシをコピーして、～大切な支援者のひとりです」という部分に気づいてほしいからです。

オレンジリングを腕にはめていて、友達に「それ何？」と尋ねられたとき、「認知症サポーター養成講座でもらったんだよ」「え？」「認知症って、ものを忘れちゃったり、わからなくなっちゃう病気なんだけど。誰でもなる病気なんだよ」「へえ」「だけど、ゆっくり落ち着いて話を聞いてあげれば、安心してもらえるんだよ」「とにかく、優しく聞いてあげることが一番なんだって」などという会話が広がっていったら、それはすばらしいことなのではないかと思います。こんなに立派に説明できないかもしれませんが、「認知症」という言葉や「ゆっくりと落ち着いて」などという対応の仕方を、別の誰かの記憶の中に少しずつとどめていく、そういうメッセンジャー役もまた、大切な彼らの役目だということを、わかっていってもらいたいと思っています。

「奉仕」の授業のない３年生から、アルバイト先のファミレスに、毎日財布を持たない認知症のおじいさんがやってくるという話を偶然聞きました。上着に名前と連絡先を縫いつけたおじいさんが来ると、まず客席に案内し、水を出しメニューを広げて「ご注文は？」と聞くのだそうです。おじいさんは、ゆっくり考えた後「これ」と指さします。「ではお会計をお願いしますね」とレジに案内し、値段を告げると、おじいさんはポケットを探し、財布がないことを確認した後、「また来る」と言って帰っていくのだそうです。中には、席に案内して水を置いたまま放っておく店員もいるのだそうですが、そういう時にはしばらくして、ちょっと不満そうに「また来る」と言って帰るそうです。そうやって毎日、同じように来るおじいさんを、店員がわかっていてそれなりに時間を過ごさせて帰してあげる。こんな風景が、どこの地域でも当たり前のように見られるようになるには、１年生が受けたような授業を継続していくことが大切だと思っています。

活動報告(4)

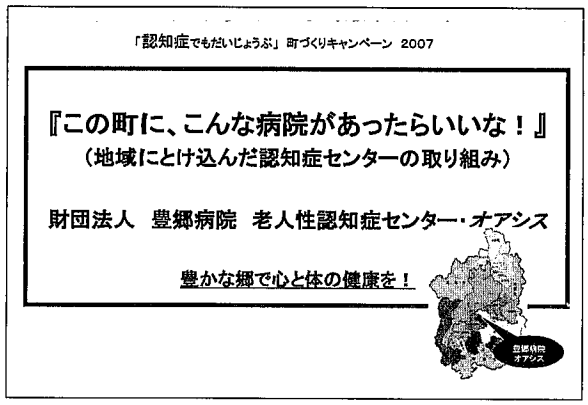
活動名称	この町にこんな病院があったらいいな（地域にとけ込んだ認知症センターの取り組み）
活動要旨	県指定第一号の認知症センター。総合病院の利点を活かし、医療と連携しながら在宅介護、早期診断を支援。認知症について家族向け学習会や社協や医師会での講演など地域での啓発活動に尽力。家族会とスタッフの会合も設けている
応募者	財団法人　豊郷病院　老人性認知症センター（オアシス）
連絡先	〒529-1168　滋賀県犬上郡豊郷町八目 12（豊郷病院内）

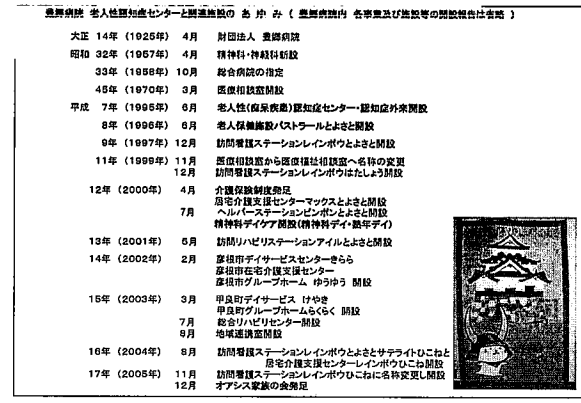
1)推薦理由

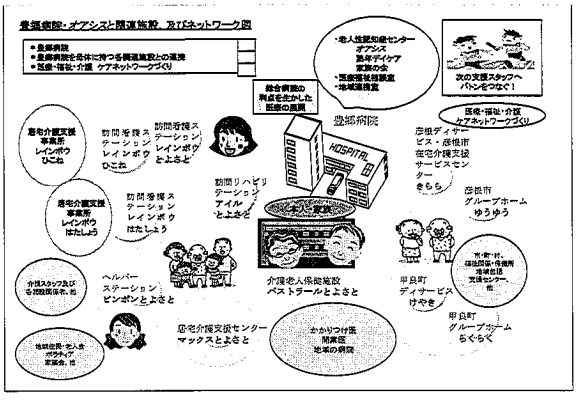
- 総合病院における認知症センターの設置が、その病院だけで完結せず、他医療機関、関連機関との連携を図っている点は重要。本来あってほしい姿であり、連携していくプロセスを、全国の病院で参考にしてほしい。
- 病院が中核となって地域での取り組みを推進していることの、安心感が大きい。医療を拠点にしつつも、在宅ケアのサポートの充実、地域住民、家族との交流、生活関連領域との協働などに力を入れ、地域で暮らし続けられることを大切に取り組んでいる点が重要。
- まさに、わが町にこんな病院があったらいいなと思わせてくれる活動である。

2)3月1日キャンペーン発表会　発表資料

町づくりキャンペーンホームページからダウンロードができます。







【 滋賀県における、認知症に関する専門医療機関の現状 】

＊ 老人性認知症センター

☆豊郷病院（オアシス） 平成7年8月に設立。
☆水口病院
☆琵琶湖病院
☆瀬田川病院

＊ その他の専門医療機関

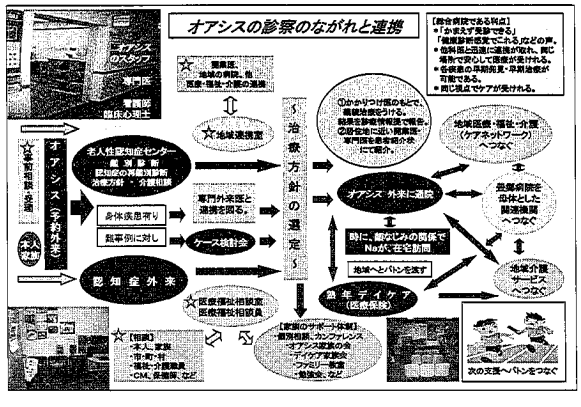
☆守山成人病センター
☆医療法人 藤本クリニック（もの忘れサポートセンターしが）を含む6箇所。

＊ 認知症相談医養成研修事業

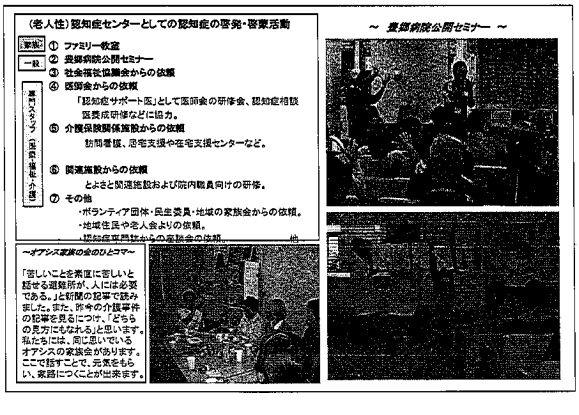
・ 平成18年より開始。受講した開業医は、県下で165名となる。

＊「ケアネットワークづくり」

・ 県内医師会で、開業医を中心に研修が企画され、地域医療と福祉の連携を模索しながら質の向上を目的としています。



【総合病院である利点】
＊「かかりつけ医を持てる」
「簡単診断感覚でこれる」などの声。
＊ 他科間と迅速に連携が取れ、同じ場所で安心して医療が受けれる。
＊ 合併症の早期発見・早期治療が可能である。
＊ 同じ流れ ケアが受けれる。



3)キャンペーン応募資料(全)

1．概　要

豊郷病院の老人性認知症センター・オアシスは、(以下『オアシス』という) 滋賀県第1号として、総合病院である財団法人豊郷病院に平成7年6月開設されました。高齢者は多くの身体疾患を抱えており、認知症に罹患している方の中でも身体合併症を抱えている方の多い現状で、既存の総合病院の中に設立された利点を生かした医療を展開しています。(＊老人性認知症センターは、名称が変更される以前は、老人性痴呆疾患センターと称されていました。)

老人性認知症センターの多くは単科の精神科病院に併設されているのがほとんどです。オアシスは、総合病院の中にあるので、「かまえず受診できる」「安心できる」など、受診しやすい環境にあるのは利点の1つです。名称の変更や認知症への理解が進んだことにより、健康診断感覚で受診される方も多くなり、軽度認知障害 (MCI) と診断される方も増えてきました。

オアシス開設以降、高齢者の在宅生活を支える関連施設も病院内で事業化されました。現在では、各関連機関との連携を密にとりつつ、入院から在宅療養を支援する体制を整えています。

在宅生活をサポートする中には認知症患者も多く含まれており、入院に際しては戸惑いから混乱をきたしやすい人も多い為に、入院生活がより安心した状況で送れるよう配慮しています。

症状に伴う混乱と進行の予防、さらに退院後の生活支援を念頭に退院調整を行い関連機関との連携を取り、スムーズな入院医療から在宅医療への移行に努めています。最近では、地域連携室を通して、他の医療機関に入院している方の退院の援助などにも関わる機会も増えています。

オアシスは、認知症についての医療情報の発信源として、院内・外の職員、住民の方の啓発啓蒙活動を通じて認知症の理解を地域に広め、本人及び家族や在宅支援スタッフ、施設スタッフを支える要としての役割を担ってきました。開設からの12年を振り返り、誰もが「この町に、こんな病院、こんな施設やサービスがあったらいいな」また、住みなれた地域で安心して医療提供ができるよう地域の皆さんと考え、実現させてきたあゆみや活動をここに報告したいと思います。

〔　熟年デイケアの紹介　〕

熟年デイケアは、平成12年7月開設 (火曜日) されました。現在、介護保険の改正とともに、認知症の予防も幅広くサービスとして受けられるようになってきましたが、当院では、まだまだ模索段階であった時から、精神科デイケアの1日を熟年デイケアに当てました。特に、デイサービスの利用をしづらい方、老年期うつ状態の方、認知症の初期の方へのアプローチとしてプログラムを準備し、治療と同時に家族ケアを行ってきました。医師、看護師、心理士、医療福祉相談員、作業療法士等が、専門的立場で個々に関わることができました。元気な方を避けひっそり過ごすうつ状態の方、物忘れが気になり隣人との接触を避け引きこもりとなった方、現在MCIと診断される方や若年性認知症の初期の方などが、同じ時間と空間をそれぞれの目標に向け、プログラムを通して楽しみながら治療・援助を受けていただきました。それにより、「病院にリハビリに行っているのよ」と言うことで若年性の方や男性の方が通院しやすく、デイケアになじむことにより介護保険サービスを利用していく時には抵抗なく移行できた事例が多くあります。ハンディキャップを持つ方に援助する事がきっかけで、自信を取り戻し心身が安定した方、趣味へとつながった方もいます。今後は、『難事例のサポートも必要では』と展開を検討しています。

若年性認知症の方や、MCI、老人性軽症の鬱状態の方などが参加され、プログラムを通して楽しい時間を共有されています。　～熟年デイケアのヒトコマ～

豊郷病院・オアシスと関連機関施設、及びケアネットワーク図

＊　豊郷病院とオアシスの連携

＊　豊郷病院を母体に持つ関連施設との連携

＊　医療・福祉・介護ケアネットワークづくり

2．地域の紹介

1）滋賀県における、認知症に関する専門医療機関の現状

（イ）老人性認知症センター：県内に４カ所 ☆

豊郷病院　（*オアシス*）　平成７年に開設。

水口病院

琵琶湖病院

瀬田川病院

（ロ）地域的な位置関係と来院される患者の居住地

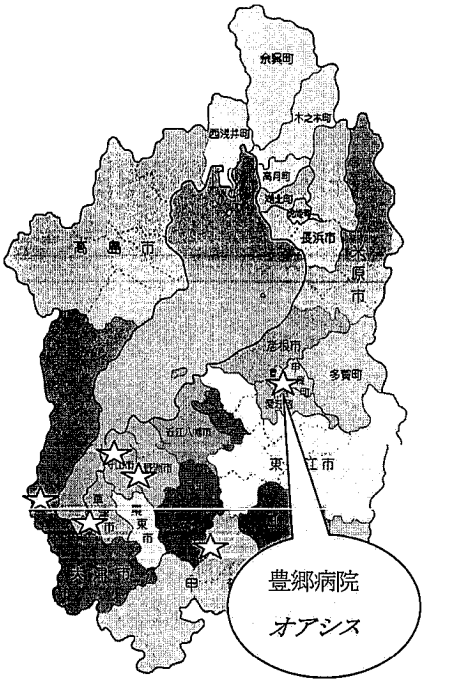
豊郷町は、琵琶湖の東に位置し、

長浜市・米原市・彦根市

多賀町、甲良町、愛荘町

東近江市、近江八幡市、安土町

などが主なエリア。



（ハ）その他の専門医療機関

守山の成人病センター、医療法人藤本クリニック（もの忘れサポートセンターしが）を含む６ヶ所の**もの忘れ外来**があります。

また、平成１８年度より始まった**認知症相談医養成研修を受講した開業医は県下１４０名以上**になり、県内各医師会では、開業医の医師を中心に「**ケアネットワーク**」の研修会が企画され、地域医療と福祉の連携を模索しつつ認知症医療福祉の質の向上を目指しています。一方で、病院と地域の連携については、認知症患者の入院医療から地域へのスムーズな受け渡しについての試みは、始まったばかりです。

（ニ）豊郷病院の地域背景

豊郷病院は滋賀県東部に位置し、彦根保健所管内の唯一の有床精神科を持つ病院です。オアシスの専門外来には、滋賀県の東部（東近江、彦根保健所管内）及び湖北（長浜保健所管内）の一部の地域に居住する方が通院しています。

この地域は、彦根市を中心に旧市街地からＪＲ沿線の京阪神への通勤者が住む新興住宅街が広がっています。一方、郊外は田園風景が広がる農村から山間部までが含まれます。古くから、地縁、血縁を大切に、お互いの関わりを大事にし、どこに誰が住んでいるかが分かり合う地域と、他府県からの転居者が集まり、明るく集う町並みの広がる地域になっています。郊外での移動は、もっぱら自家用車が使われ公共機関の利用は限られた範囲にとどまっています。高齢になっても日常の移動に自家用車は欠かせません。

2）地域で必要とされて設立された豊郷病院の創立史

琵琶湖の東、風光明媚な田園地帯に位置する財団法人豊郷病院は、豊郷町出身の起業家、七代目伊藤長兵衛翁が、当時のこの地の深刻な医療状況を憂い、郷土愛と報恩の精神から１９２５年（大正１４年）に浄財を寄付して設立されました。当初の病者、社会的弱者の側に立った病院の理念は、今日に脈々と引き継がれ、福祉・介護にも厚い地域支援病院として運営されています。同時に医療技術の進歩、医療を取り巻く社会環境の変化に立ち遅れないように、常に知識を吸収し病院の改革を行い、地域の中心的な医療施設として認知されています。

「医療人である前に常識ある社会人であることをモットーに、先人の築いてきた歴史ある病院をさらに地域と密着した病院へと発展させたいとの思いで、スタッフ一同日々努力しています。」

病院の基本理念

豊かな郷で心と体の健康を　家族のように

豊郷病院の基本方針

1，郷土愛と博愛の創立精神に基づき、地域の医療・保健・福祉を支える。
2，医学進歩に同調し、わかりやすく信頼される医療を行う。
3，温もりと心をこめたサービスで、快適な療養環境を築く。
4，患者さまの権利を尊重し人権をまもる。
5，職員の労働環境に配慮し、効率よい安定した病院経営を行う。

3）オアシスの開設時の状況

高齢者人口の増加に伴う認知症患者の増大が危惧されたおり、滋賀県内でも認知症啓蒙活動にいち早く彦根保健所が取り組み、認知症ケアに関して、現在の宅老所のようなものを実践した実例もありました。同時に保健所内で浜松方式等の普及や他の認知症ケアや診断について、積極的に普及活動を行ってきました。管内の市町村でもこれに呼応する形で保健センターが中心となり「かなひろいテスト」や認知症に関する知識の普及活動を行ったのですが、実際の現場では、認知症（痴呆症）という言葉だけが先走り、実情は「どうしていいのか分からない」「そのメカニズムさえ理解できていない」状況であり、『認知症になるとみんなが困ってしまう』現状に直面しました。患者の援助には地域活動が重要であることは間違いないものの、そのためには中核となる疾患の理解が不可欠であり、認知症の診断、及び関連する知識の普及や啓発が可能な認知症センターの開設が切望され、県下始めての認知症疾患センターを豊郷病院が開設することになりました。

「お年寄りの脳とこころの相談室」としてセンターが開設された翌年、老人保健施設パストラールとよさと、を開設。この２つの事業は、浜松医療センターが、近隣の老人保健施設と連携することで、医療と認知症ケアを科学的に分析し、認知症のより良いケアを見いだそうとされたことによるものでした。このことをきっかけに、医療機関と在宅をつなげ、慣れ親しんだ地域で安心して生活が続けられるよう、数々の諸施設が豊郷病院を母体として開設されました。

豊郷病院　老人性認知症センターと関連施設の　あ　ゆ　み

大正	14年	(1925年)	4月	財団法人　豊郷病院
昭和	32年	(1957年)	4月	精神科・神経科新設
	33年	(1958年)	10月	総合病院の指定
	45年	(1970年)	3月	医療相談室開設
平成	**7年**	**(1995年)**	**6月**	**老人性(痴呆疾患)認知症センター並びに認知症外来開設**
	8年	(1996年)	6月	老人保健施設パストラールとよさと開設
	9年	(1997年)	12月	訪問看護ステーションレインボウとよさと開設
	11年	(1999年)	11月	医療相談室から医療福祉相談室へ名称の変更
			12月	訪問看護ステーションレインボウはたしょう開設
	12年	(2000年)	4月	介護保険制度発足
				居宅介護支援センターマックスとよさと開設
				ヘルパーステーションピンポンとよさと開設
			7月	精神科デイケア開設　(精神科デイ・熟年デイ)
	13年	(2001年)	5月	訪問リハビリテーションアイルとよさと開設
	14年	(2002年)	2月	彦根市デイサービスセンター　きらら
				彦根市在宅介護支援センター及び
				彦根市グループホーム　ゆうゆう開設
	15年	(2003年)	3月	甲良町デイサービス　けやき及び
	15年	(2003年)	3月	甲良町グループホームらくらく開設
				甲良町グループホームらくらくに、訪問看護ステーションレインボウが、モデルケースとして訪問開始となる。この研究事業が後に、他の施設にも必要とされ、訪問看護事業が展開していく。
			7月	総合リハビリセンター開設
			8月	地域連携室開設
	16年	(2004年)	8月	訪問看護ステーションレインボウとよさとサテライトひこね開設
				居宅介護支援センターレインボウひこね開設
	17年	(2005年)	11月	訪問看護ステーションレインボウひこねに名称変更し開設
			12月	オアシス家族の会発足

(豊郷病院内　各事業及び施設等の開設報告は省略とする)

３．活動の内容

（イ）組織・事業内容

目　的：この事業は、滋賀県から指定され設置し、保健・医療・福祉機関との連携を図りながら、老人性認知症患者の専門医療相談、鑑別診断、治療方針の選定を行い、夜間、休日の救急対応や関係者に技術援助を行うことにより、地域の老人性認知症患者の保健・医療・福祉サービスの向上を図ることを目的としています。

① 職員の組織

医師、看護師、医療福祉相談員、臨床心理士、（作業療法士）他。

② 事業内容

Ⅰ）　専門医療相談

；初診前医療相談

・患者家族等の電話、面談照会

；情報の収集・提供

・高齢者総合相談センター・健康福祉センターとの連絡・調整

Ⅱ）　鑑別診断、治療方針の選定

；鑑別診断→頭部ＣＴ・ＭＲＩ（ＳＰＥＣＴ検査は他院に依頼）心理検査

；治療方針の選定、移送先の紹介（必要な場合）

Ⅲ）　救急対応；救急外来にて対応→休日も豊郷病院精神科医師が対応

Ⅳ）　個別の患者処遇に係る関係機関との調整

Ⅴ）　技術援助、啓発・啓蒙活動

Ⅵ）　オアシス・センター機能の充実；職員の資質向上、研修会、学会出席

Ⅶ）　その他；熟年デイの運営援助、家族会のサポート　　など。

（ロ）診察内容（診察の場から安心が得られる連携へ・バトンをつなぐことの大切さ）

オアシスは完全予約制の専門外来であり、地域に生活する方の通院医療が中心です。受診には院内・外の医師からの紹介により、また、福祉関連機関からの紹介や、家族、本人からの申し出により予約を受けます。診察は、一般検査と脳機能の各種の検査を通じ鑑別診断を行い、治療の選択、同伴の家族や介護スタッフへの介護指導が含まれます。鑑別診断・治療方針の選定後に、かかりつけ医へ継続通院される方は、結果の報告（診療情報提供書）とともにこれまでの医療の継続を勧めます。一方で専門医療を必要とするケースは、かかりつけ医と連携しつつ継続通院となります。当院を希望される場合は、オアシス外来の通院も可能です。

オアシスが総合病院の中にあるということは、認知症の鑑別に際し、治療可能な身体疾患についての対応が可能ということにもつながります。いわゆる行動障害の中には身体疾患の治療により改善可能なケースもあり、並行して他科専門医を受診することで容易に専門治療を受けることができると考えられるからです。また、このことが逆に各専門外来医の認知症への理解が進み、継続して通院している方やその家族の変化までにも気づき、認知症鑑別診断の依頼が増え、認知症の早期発見、早期治療ができる事にもつながっています。「最近様子がおかしい。認知症が進行したのでは？」といってこられる方の中には、身体疾患の継続治療が中心の方もおられます。重度の貧血が見つかり治療することで意欲が出た方や、「食事への意欲がない」といって来院された中には、便秘や逆

流性食道炎の方もおられ、専門医による治療が容易に受けられることで早期治療へとつながることは、認知症を罹患した高齢者の健康の維持についての総合病院の利点を生かしていると思われます。内服に関しても他の専門医に相談ができ、より適切な薬剤管理が可能であり、患者、家族にとっても、一カ所の病院でみてもらえる安心感にもつながっていると考えています。

認知症は、日常生活がうまく送れないという生活障害が問題となります。広く「認知症」が認識される一方で、日常生活をうまく送れる工夫については、個々のケースで同じやり方が通じるとは限りません。医療従事者の多くは治療、処置には長けていても生活障害を医療の目で評価し在宅で援助することは、まだまだ未熟であり容易ではありませんでした。認知症の症状によって引き起こされる日常生活の送りにくさを本人の立場で受け止め、 本人の毎日の生活で苦痛に感じる場面を減らすための関わりの工夫が必要となってくるのですが、なかなか理解までいかない時期もありました。

また、本人を支える家族への配慮も同時に必要であり、認知症の方が日常を自宅で安心して過ごしていただくためには、日によって変化する本人の症状・病気の理解と介護の方法を個別に指導する場面も必要となります。時間をかけて関わらないといけないケースや難事例に対しては、必要な場合は、家族のみに来院していただき話し合いをすることも多々ありました。

また、当院は、病院を母体として在宅医療に携わる訪問看護ステーションを３カ所併設しています。初めから３カ所あった訳ではなく、需要と供給で増えていった経緯があるのですが、関連施設であるということから必然的に認知症の方の訪問看護を依頼するケースも増えています。訪問看護師は、混乱期の認知症の方や家族を支えるバックアップ的役割として重要であり、また、在宅医療を支えるスペシャリストとして、今後も重要なものと考えています。オアシスでは、認知症専門の研修を受けた看護師が、訪問看護師の経験を重ね、生活をともにする家族の心情をくみ取り、個々のケースによりますが、外来での顔なじみ関係で訪問看護師と同行訪問することで安心感や信頼関係が得られました。これは、今後も必要な活動と考え、新たな展開も検討の視野に入れています。在宅に看護の目が入ることは、他の家族の認知症の早期発見にもつながりました。そしていつの間にか『併設の訪問看護ステーションの看護師は、認知症の方の看護に長けている』と評判をいただき在宅医療の担い手としての役割を果たしています。また、同訪問看護ステーションは、併設のグループホームに制度化される以前より研究モデルとして訪問し、看護職として身体管理をすることで医療との連携を図り、早期発見・早期治療の役割を果たし、そこで働くスタッフの信頼や安心感にもつながりました。この一連の流れは、今後も必要とされ、現在では、他の施設にも訪問事業が展開さています。

オアシスもこの事業をバックアップしています。

（平成１９年６月：訪問看護ＳＴレインボウひこねの看護師の活動、フジＴＶで放映）

（ハ）連携の大切さ：

このように、オアシスは、病院という医療の現場から、住み慣れた地域で継続して療養生活ができ、また、本人や家族が安心していただける為に、受け皿である在宅でのサポートの大切さ、充実さをこの１２年を通し身近で感じてきました。

豊郷病院自体も総合病院として在宅施設を整えていったなか、介護のバトンを渡すには、信頼関係が必要です。相談も専門施設からの件数も増え、専門職からも、オアシスのセンターとしての役

割を期待されるようになってきました。

認知症は、病状の進行とともに、身体合併症の発生頻度も多く、当院にかかりつけ医がおられない場合は、地域の開業医や必要に応じて、院外の専門医との連携を図りながら、認知症の診断、治療、介護のみならず、老年期疾患を抱える方の日常生活を見守る事ができるよう、事業を展開してきました。安心して住み慣れた地域で生活していただくために、在宅を支える各種介護サービスのスタッフと研修会をともに開き、常に連携を取ることで、本人や家族が安心して医療が受けられるようにと、依頼や、必要に応じて、ケース検討会やカンファレンスにも参加してきました。現在も、医療情報の発信源として、在宅医療・介護を支える各種関連機関（MAX・レインボウ・アイル・ピンポン等）　や他の事業所、福祉関係、開業医や地域の病院とも広く連携を図り、長くなじみのある環境で暮らしていただけることを目標に、医療を提供していきたいと考えております。

４．活動の成果と今後の展望

１）活動の成果とその後

（イ）連携を取った事例・・・ある若年性認知症の男性

平成１４年頃は、ご自分の母親がオアシスに通院するので車で送迎のため付き添いに来られていたＳ氏。平成１５年のある日、突然一人でオアシスに来られる。「一度、自分をみてほしい」と言われ、詳しく尋ねると、「妻に言われた」と・・・。当時５９歳。

頭部ＣＴ所見で前頭葉と頭頂葉に軽度の萎縮を認め、長谷川式スケールは２５～２３点でした。認知症の診断で薬物治療が始まりました。まだ自動車の運転はでき、ＡＤＬも保たれていました。平成１６年より、当院の熟年デイケアに通院を開始。２年後進行がみられ車の運転をやめ妻の送迎に移行して行くのですが、まだ６０代前半であったため、妻の動揺は大きく、自宅での様子を話されるたびに、涙、涙でした。その都度、診察や家族会、介護教室、個別の相談でスタッフが関わりサポートするのですが、認知症は悲しいかな、現段階では進行形です。医療福祉相談員と連携し、介護保険の申請をすすめ、介護保険の通所デイサービスへと切り替わっていかれました。診療はオアシスが受け持ち現在も通院中です。そのころには本人は、集団になれ介護保険のサービスもスムーズに利用でき、家族も当初の混乱を切り抜け関わりを学び、次のスタッフにゆだねられた後も安心して地域のサービスが利用できた、という例でした。

このケースは、オアシスで診察を受け、当院の熟年デイケアに参加され、オアシスとしてケース検討会が開かれ、顔なじみの看護師が自宅訪問をかさね、家族の厚い信頼と希望で同系列の居宅と訪問看護が受け持ち、地域の通所介護サービスへと移っていかれたケースです。在宅では、家族の不安を軽くし安心されることにより、認知症患者が安心して生活できると考えます。

（ロ）その他、認知症の啓発・啓蒙

① ファミリー教室：現在では、併設の３つのデイサービスとともに行っています。

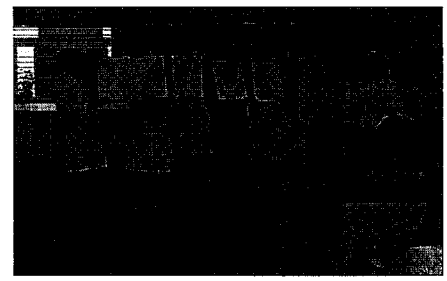
② 豊郷病院公開セミナー（地域住民を対象に身近な疾患の予防と啓発活動を実施）

平成１８年３月１１日「認知症って老化？それとも病気？」出席者数　約９０名

医師・心理士・看護師・医療福祉相談員による講演とパネル展示。

平成１９年３月１０日「認知症の治療とリハビリ」出席者数　約１１０名

医師・薬剤師・作業療法士による講演。



本館外来待合いホールにて公開セミナー開催

③ 社会福祉協議会からの依頼：(年に約５件以上)

平成７年オアシス開設当時より毎年各地域より依頼があり、センターの医師や看護師・医療福祉相談員が出向く。

内容としては、主に専門スタッフ向けと地域住民に向けに大きく分かれる。

④ 医師会からの依頼：

「認知症サポート医」として医師会の研修会、認知症相談医養成研修などに協力。

⑤ 介護保険関係施設からの依頼：

訪問看護、居宅や在宅支援センターなど。(時には、職種をこえてともに学ぶ)

⑥ 関連施設からの依頼：

とよさと関連施設及び院内職員向けの研修。

⑦ その他：ボランティア・老人会・民生委員・各地域の家族会からの依頼や認知症専門誌の依頼で座談会に看護師が出席するなど。

(ハ) 家族のサポート体制と家族の要望

また、オアシスは、開設当初より、各地域の家族会の紹介をその都度してきました。まず平成１２年に開催されたのですが、それ以降は、地域の家族会の紹介に終わっていました。しかし、「病状を知っている先生や看護師さんがいるところで・・・」「本人は介護サービスが受けられるが、２４時間休みなしの私達は、どこで癒されたらいいのですか？」等、通院されている家族からの声を受け、平成１７年１２月より、月１回、運営は家族会側で、病院は、場所の提供と、その時々のテーマを受けてスタッフが参加するという形で開催しています。

現在、「この日があるから日々がんばれるのよ。」「仲間がいることで癒される」「新しい認知症情報が分かりました。」等の声を聴きます。今後は、他の家族会との交流を・・・と考えていますが、「まだまだ、自分たちのことで精一杯」との声が多いのが現状です。

外来終了を待って
月１回、オアシス家族会
を開いています。

また、介護する立場により、思いや、接し方、視点が違ってきます。毎日の家事に戸惑いながら日々変わっていかれるご本人を前に、途方にくれ、社会から孤立されていく男性介護者からの相談も増えてきました。オアシスでは、*「男の介護」*と題して新たなサポートも必要ではないかと考えています。

家族会が発足して１年がたった時より、オアシス家族会通信が発行されました。

家族の思いが詰まった原稿がたまるつど、スタッフがまとめ、発行しています。

～ オ ア シ ス 家 族 会 通 信 ～

（Ｎｏ．１　娘が自分の母親を他府県から引き取り介護しているケース）

初めてオアシス家族会を開いて早いもので１年が過ぎました。回を重ねるうちに個人個人の悩みや困っていることを話せるようになってきました。「自分だけがどうしてこんな思いをして介護するのか。」という時期もありましたが、皆さんの話を聞いたりしているうちに、「みんな一緒なんだ。」「もっと困っている人がたくさんいる。」事を知らされました。反省しています。この会に出会い、「こんな時にどうしたら。」と相談できる事も、私にとって随分助けられました。「次回にはこんなことをみんなに聞いてほしい。」と思い、１ヶ月の来るのが待ち遠しい時もあります。介護している人は、親、嫁、舅、ご主人と立場も生活も違いますが、『一日一日を本人が無理なく過ごせるように』と願う気持ちは一緒です。昼夜の区別なく生きていく本人と向き合って、その日その日を越えていく時に、やっぱりオアシス家族会に出会えて良かったと思っています。

先生方のアドバイスをいただいて、『本人たちがこれから病気の進行を少しでも遅らせ、人格が変わることなく生きていけるように』私たちも、一日一日を頑張っていきたいと思っています。今を話せる、聞いてもらえるこの会をこれからもよろしくお願いします。今は“　今日一日が、私の命！今日一日をどう生きる？！　”という気持ちでいっぱいです。 今後とも私たちをどうぞ、見守ってください。

（Ｎｏ．２　ご主人の父親を嫁の立場で介護しているケース）

他の病気の場合とは違って認知症の場合、介護する側の努力や思いやりで、認知症患者はそれなりのリズムある生活が送れると思います。でも私たち介護者は、聖人君子ではありません。日々の生活に追われる平凡な人間です。毎日、毎日張りつめた気持ちを維持することはできません。弱音を吐きたいこともあります。しかし、無理解な人々（友人でさえも）に、胸の内を明かしても愚痴としか思ってもらえません。ただ、受けとめてもらいたいだけなのに・・・。

“オアシス”の集まりでは、同じ悩みや苦しさを共有する仲間、同志の存在を実感できます。介護者の“孤立感”を遠ざけてくれます。そして、この実感が何よりの日々の空しさの支えとなります。今年も無事乗り切っていけそうです。ありがとうございます。

（Ｎｏ．３　ご主人の母親を嫁の立場で介護しているケース）

『オアシスの仲間に入れて頂いて・・・』

オアシスの診療を受けてからもうすぐ４年が過ぎます。要介護の認定を受けてから丸５年、もっと永い日が過ぎたように思います。オアシスで私たちが愚痴りながら話していると、看護師さんが体験談を話され、この病気の人の対応を教えてくださり、『おばあさんは病気なんだ、“焦らず”“やさしく”“否定せず”接しなければ』と思っても大変難しいことです。そしてこの病気は『おおきに』が言えないのですね。その一言があればもっと素直に付き合えるのに・・・・・。この頃は、できる限り、起きているときは私のそばにいてもらうようにしています。次から次へ思っていないことが起こります。これからも指導してください。

先日も診療時間前に電話しました。先生が電話に出てくださって、教えてくださり助かりました。また、その日の午後、看護師さんからも電話をもらって心強かったです。ありがとうございました。

これからもデイサービス、ショートステイ、そして豊郷病院のオアシスの方々に助けて頂きながら、おばあさんと交わっていこうと思っています。よろしくお願いいたします。

（Ｎｏ．４　娘が、母親を長距離介護しているケース）

長距離介護を始めてちょうど３年が過ぎた頃、訪問看護師さんにお誘いを受けてこの家族会に初回から参加させて頂いております。おかげさまで、私たちの心のよりどころとして文字通り泉が湧くように、日頃の悩みを顔を合わせることにより、『その時だけでも笑顔になれれば』と思います。私の立場は、他の家族の方とは少し違いますが、身体的な病気と違い認知症患者をかかえる家族の悩みは、皆同じです。そんな悩みをこの家族会に行けば『聞いてもらえる』『自分の痛みとして聞く耳が持てる』。話の和の中に加わって頂ける看護師さん、要所で的確なアドバイスをいただける先生、ほんとうに感謝しております。テレビで同じ病気を苦にした痛ましい事件を見るにつけ、この会のおかげで私も思いを新たに気持ちを切り替えて頑張れます。これから日々変わりつつある人格に、諸先輩方のご意見を聞かせていただきながら、どんな形であれ最後までつきあっていくつもりです。

（Ｎｏ．５　奥様が、徘徊するご主人を介護され、寝たきりとなられた今も、在宅で介護されているケース）

『同士から元気をもらって帰路につく！！』

先日の新聞で、西明寺のご住職中野様の記事で《苦しい事を素直に『苦しい』と話せる“避難所”が人には必要である。周りに誰も話せる人が居なければ、寺に話しに来る、という道もある。》　と書かれていました。また、この頃の介護事件報道でも、「どちらの味方にもなれるなぁ」と思うこともあります。

私達は、先生や看護師さん、オアシスの同士（家族会の皆さん）の方々に、話す事で救われているように思います。私は、世間では余り人前で苦労話はしない方ですが、家族会では違います。時に、私の話でワンマンショーに成る事もあります。思い起こせば、７ヶ月の間、一日に１時間しか眠れなかった時期もありました。「なぜ私だけこんな思いをするのだろう」、と思っていましたが、今では、可哀相に思え、愛おしくも思えます。一時期の苦労も一段落し、他の方の話を聞くとき、「ああ、そうだったなぁー」　と振り返ることができます。

次回の集まりを楽しみに、同士から元気をもらって帰路についています。

2）今後の展望（課題）

老人性認知症センターは、介護保険制度が整備される以前の認知症医療の黎明期に開設され、現在に至ります。介護保険制度により高齢者医療、特に認知症の方の支援に関わる職員も増えてきていますが、基本的な関わり方は変わるものではありません。医療、福祉や介護の視点の違いはあるものの認知症の方を支える目標は同じです。医療の場が敷居が高く相談がしづらいという福祉関係者がいることも事実ですが、一方で、気楽に受け持ちケースの相談を持ちかけてくる管外の福祉施設の職員もいて、今後も気軽に受診や相談のできるつながりを用意していきたいと考えています。最近では、以前にも増して（平成１５年８月　院内に地域連携室開設）地域やその他の医療機関からの受診依頼が増えてきました。その中には、入院中のケースの紹介もあり、相互のつながりが強まった感があります。認知症の困難なケースを抱え、看護に悩む病棟や家族の様子も見えてきました。今までの地域との連携の視点を、当院だけでなく入院生活をサポートする管内・外の病院職員へと、認知症センターとしての役目は広がっています。

また、介護施設が均質化し従来の介護保険制度になじめない方がいることも事実です。

今後は、高齢者のうつ病、若年性認知症や集団になじめず地域に受け入れが困難なケースのデイ等も医療の立場として検討していかなければならないと考えます。

オアシスは、何も特別な事をしてきたわけではありません。誰でもが少しの工夫で可能となることを伝えあい広げていきたいと考えています。認知症でも慣れ親しんだ地域で安心して暮らしていけるように、医療提供の場として皆さんを応援していきます。

認知症を理解することでご本人や家族、そして、そこに関わるスタッフが落ち着いて向き合えることが大切で、それを適切な医療情報として提供することが、認知症を知っていただく第一歩だと考えています。

「脳とこころの相談室」　オアシス　より。

平成１９年１０月１５日

財団法人　豊郷病院　老人性認知症センター・オアシス　看　護　師：斉藤　容子

協　力・財団法人豊郷病院　老人性認知症センター・オアシス・センター長・医　師：成田　　実
・財団法人豊郷病院　老人性認知症センター・オアシス・非　常　勤　医　師：世一　市郎
・介護老人保健施設パストラール・とよさと　　副　施　設　長：種村　栄二
・財団法人豊郷病院　医療福祉相談室
・財団法人豊郷病院　地域連携室
・訪問看護ステーションレインボウ
・オアシス家族の会

活動報告(5)

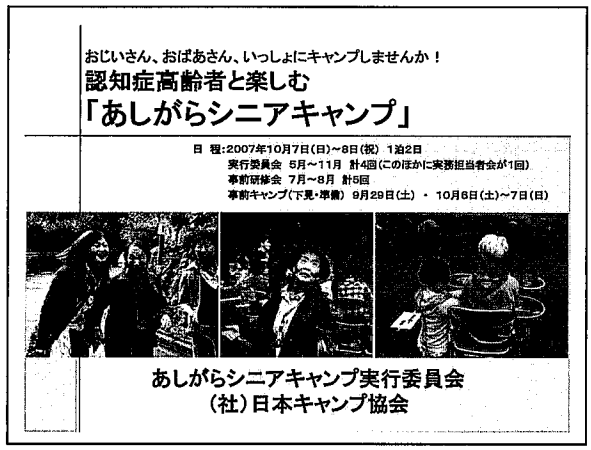
活動名称	おじいさん、おばあさん、いっしょにキャンプしませんか！認知症高齢者と楽しむ「あしがらシニアキャンプ」
活動要旨	「Camping for All（すべての人にキャンプを）」を理念に認知症高齢者のキャンプを１０年以上実施。地域の行政、福祉、学校関係者の協力を得て、少子高齢社会のキャンプ場の使い方を開発・普及し、キャンプのもつ地域づくりの可能性を伝えている
応募者	あしがらシニアキャンプ実行委員会／ 社団法人　日本キャンプ協会
連絡先	（社団法人　日本キャンプ協会）〒151-0052　東京都渋谷区代々木神園町3-1　国立オリンピック記念青少年総合センター内

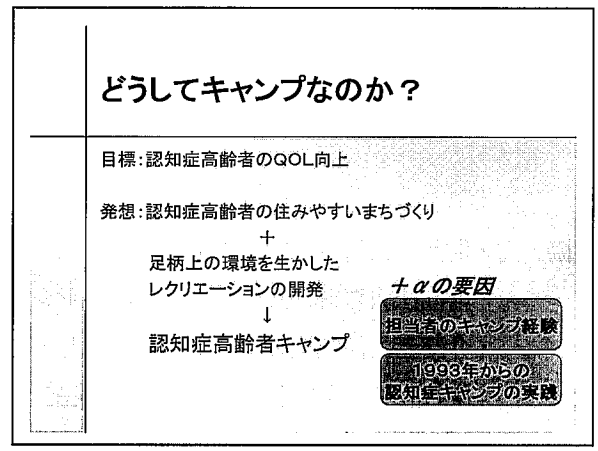
1)推薦理由

- 楽しいキャンプの中で認知症の人と一緒に過ごすということを１０年以上の歴史の中で地道に取り組んでこられた実績がある。その中で認知症に対する体験的な理解を広めてきており、継続的に取り組まれている活動である点がすばらしい。
- 自然とふれあう貴重な機会の中で、自然な形で世代間の交流ができ、支え合いも生まれている。認知症の人が持っている能力を発揮できる場となっている。また、キャンプを支えるスタッフの変化も生まれており、関わる人たちすべてに意義ある活動となっている。
- キャンプ設備の有無でなく、「話し合い、アイディアの出せるスタッフがいるところならばどこでもできる」ことが示されている。そんなことできる？という先入観で見るのではなく、若者が企画から参加し、いろいろなボランティアの参加と支えにより実現可能な活動である。全国各地で取り組まれることが期待される。

2)3月1日キャンペーン発表会　発表資料

町づくりキャンペーンホームページからダウンロードができます。





キャンプの評価

- お年寄りのたくさんの笑顔...もちろん、スタッフも（^_^）
- スタッフとして参加した人、それぞれの気づき
  - 認知症について知る→連続講座とキャンプ
    （学生・地域住民）
  - 認知症高齢者の可能性と地域のチカラを知る
    （家族の立場、福祉施設職員の立場、行政の立場、社協の立場、地域住民の立場、医療関係者の立場、ボランティアの立場、野外活動施設の立場...）

たくさんの種が地域にまかれた

認知症のお年寄りに キャンプは向いている

- キャンプは危険な活動ではない
  - 意義ある挑戦を可能にするためのリスクマネジメント
- 認知症のお年寄りにキャンプは向いている
  - キャンプの素朴は生活は昔の生活に似ている
  - 柔軟なプログラム変更ができる
  - マンツーマンスタッフが安心を与える
  - 新しい出会いと新しい体験の場となる

...そして、周りの人間が学ばせていただける

おじいさん、おばあさん、
いっしょにキャンプしませんか？

3)キャンペーン応募資料(全)

1．概　要

キャンプというと、子どもたちが行く林間学校のようなものや、家族で楽しむオートキャンプのようなものを思い浮かべる人が多いのではないでしょうか？「キャンプは若くて元気な人が楽しむもの」というイメージがあるかもしれません。しかし、それだけではありません。私たち日本キャンプ協会では「Camping for All（すべての人にキャンプを)」を理念のひとつに掲げていますが、その言葉の示すとおり、さまざまな対象のキャンプが実際に行われています。その歴史は意外と古く、昭和２８（１９５３）年には日本で初めての肢体不自由児のキャンプが行われました。ここで紹介する認知症高齢者のキャンプも平成５（１９９３）年に始まりましたので、すでに１０年以上の歴史があることになります。

日本キャンプ協会としても、平成１１年に「第１回全国痴呆性老人キャンプ in にいがた」を開催し、以降、大阪、熊本、和歌山…と場所を変えながら、認知症高齢者キャンプの普及に取り組んできました。そして平成１９年度は、神奈川県足柄上保健福祉事務所から声をかけていただき、実行委員会の一員として参加する形で「あしがらシニアキャンプ」実施のお手伝いをしました。

お年寄りといっしょに過ごすキャンプ本番は、平成１９年１０月７日～８日の１泊２日という短いものでしたが、この事業そのものが地域に暮らす認知症高齢者に対する理解を深めるための活動と位置づけられ、そのための仕掛けが作られました。それが「あしがらシニアキャンプボランティア講座～いつまでも自然の中へ～」という５回の連続講座であり、本番の１週間前に行われたプレキャンプでした。この事前準備を通じて、「このキャンプの意味はなに？」「そもそも認知症ってなに？」「認知症のお年寄りとどう接すればいいの？」「どうすれば認知症のお年寄りと楽しく安全に過ごすことができるの？」といったことを学び、キャンプに臨みました。

参加された認知症高齢者は女性１２人、男性５人の合わせて１７人。それぞれにマンツーマンで高校生・大学生を中心としたボランティアスタッフが付き、１泊２日のキャンプを楽しみました。最初はお年寄りもマンツーマンスタッフも緊張気味で、元気よく交わされる「こんにちは。どうぞよろしくお願いします」のあいさつもどこかぎこちなさを残しています。しかし、時間がたつにつれ会話も交わされるようになり、選択プログラムの始まるころには自然な笑い声があちこちから聞こえるようになりました。ボランティアスタッフの作ってくれたおいしい食事をとり、キャンプファイアーの火を囲み、コテージでいっしょに眠り、みんなで歌をうたう。こうして時間はあっという間に過ぎ、無事にキャンプは終わりました。

このキャンプを通じて、お年寄りに楽しい時間を持っていただいたことはなによりでした。マンツーマンのボランティアスタッフがいたことで、とてもリラックスした状態でさまざまなプログラムを体験していただけました。「普段見られないような、とてもいい表情をされていました」というグループホーム職員の声が、楽しんでいただけたことを証明しています。

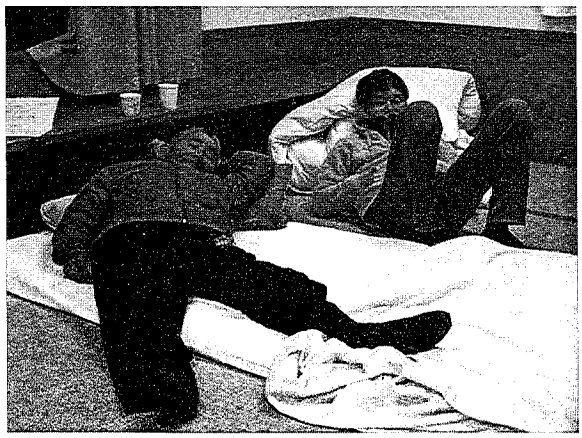
しかし、このキャンプでわかったことはそれだけではありません。ボランティアとしてかかわってくれた多くの人は、自分たちの住む地域に認知症という障害をもった方々が暮らすことに気づきました。認知症がどのような障害なのかということも、少し、学びました。そして、認知症のお年

寄りの心強い味方になってくれる人たちが、身近なところにたくさんいることもわかりました。また、ちょっと車を走らせば、認知症のお年寄りにも利用しやすい野外施設があることもわかりました。そして、その野外施設も、高齢者の方々に利用していただくために必要な配慮を知ることができました。

このキャンプでは、１７人のお年寄りのために１００人を超える人々が集まりました。そのすべての人が、それぞれなりに認知症にまつわる気づきを得てくれたのではないかと思います。すでに、グループホームや社会福祉協議会から、来年もキャンプをしたいという前向きな声が上がっているそうです。そうして、この地域で認知症高齢者のキャンプが当たり前のことになれば、より多くの気づきが積み重ねられ、より多くの人にその気づきが引き継がれるでしょう。それはとても楽しみなことですし、キャンプにかかわる者として、キャンプがそのきっかけを提供できたことをとてもうれしく思っています。

赤いバンダナはシニアキャンプの主役の印

マンツーマンスタッフとのんびりおしゃべり



休憩時間も大切なプログラムです

ストロー吹き矢で高得点をねらいます

キャンプの最後に記念撮影

２．地域の紹介

まちづくり＋キャンプ場＝認知症高齢者キャンプ！？

「あしがらシニアキャンプ」のプロジェクトは、約１年前に、神奈川県西部の足柄上地域を管轄する足柄上保健福祉事務所の保健師である山本恵子さんから「認知症のお年寄りのキャンプをやりたいんです」というご相談を受けたことから始まりました。山本さんはキャンプナースとして多くのキャンプの経験があり、地域に対して認知症を知っていただく仕事の担当になったときに、その方法としてキャンプをすることを思いついたのだそうです。

このキャンプの企画書を見ると、事業の背景が次のように書かれています。

１．足柄上は、県域の中でも高齢化率が高い。また人口減の自治体もある。地縁・血縁に基づく助け合いなどのコミュニティはこれまで比較的機能してきた。しかし、これから一層進む少子高齢社会においては、地域で認知症高齢者及びその家族を支援する社会資源の充実を、はっきり課題として意識した上で取り組むことが必要である。※コラム参照

２．足柄上は、キャンプ施設が多い。少子高齢社会では、高齢者のデイ・キャンプなどキャンプ場の新しい使い方も、開発・普及していく必要がある。

足柄上地域の高齢化率は２０．０%で、神奈川県全体の１７．０%よりも高い。また、その中で高齢化率の高い松田町と山北町では人口も減少しており、高齢化によって従来の地域コミュニティの機能が低下することが危惧される。一方、高齢化率の低い大井町と開成町では、域外からの人口流入によって人口が増えており、従来の地域コミュニティとの融合に課題を抱えている。

	高齢化率(%)	H9.4.1.人口	H19.4.1.人口	人口増加率
南足柄市	20.2	43,798	44,087	100.7
中井町	19.3	10,369	10,064	97.1
大井町	15.9	16,006	17,749	110.9
松田町	22.0	13,235	12,054	91.1
山北町	25.0	14,105	12,317	87.3
開成町	18.7	12,914	15,833	122.6
足柄上地域	20.0	110,427	112,104	101.5
神奈川県	17.0	8,282,288	8,854,830	106.9

※高齢化率は平成１８年１月１日のデータ

「認知症高齢者の住みやすいまちづくりが必要である」ということと、「近くにキャンプ場がある」ということを結びつけるのは、山本さんがご自身の経験を通じて、キャンプの持つ地域づくりの可能性を感じていたからだと思うのですが、周囲の人はさぞびっくりしたのではないでしょうか。心の中で「キャンプなんていやよ」とか「そんなのムリムリ」と思っていた人もいたかもしれません。それでも、それをおもしろいと感じてくれる人々に恵まれ、ゴーサインが出されたのです。

大規模な実行委員会

実施にあたっては実行委員会が組織されました。足柄上地域の１市５町（南足柄市、中井町、大井町、松田町、山北町、開成町）それぞれの行政の福祉担当部署と社会福祉協議会、医師会、病院、広域福祉センターのほか、ボランティア部のある県立大井高校、福祉と看護の学科を持つ東海大学など、多くの機関、団体が名前を連ねていました。もちろん、この事業の目的を考えると、このように幅広いかかわりが必要であることはわかるのですが、１泊２日のキャンプのための実行委員会としてはとても大きいなぁという印象を受けました。

実行委員名簿

南足柄市高齢介護課長	中井町保健福祉課長	大井町介護福祉課長
松田町福祉課長	山北町福祉課長	開成町福祉課長
南足柄市社会福祉協議会職員	山北町社会福祉協議会職員	開成町社会福祉協議会職員
足柄上医師会会員	足柄上病院職員	広域福祉センターひかりの里職員
県立大井高校職員	東海大学健康科学部看護学科職員	東海大学健康科学部社会福祉学科職員
足柄ふれあいの村職員	足柄上保健福祉事務所保健予防課長	日本キャンプ協会職員

実際、第１回の実行委員会では「なんで私はここにいるのだろう？」「認知症のお年寄りとキャンプなんて危ないよ」と思いながら席に着いていた人もいただろうと思います。淡々と進む実行委員会に「こんなに大がかりな実行委員会にすると、かえって大変じゃないかな？」と心配になったのも事実です。

しかし、その心配は取り越し苦労でした。それぞれの役割が明確になるにつれ、いろいろなことがスムーズに動くようになってきました。もちろん、最後まで最初に抱いた否定的な気持ちを払拭しきれなかった人もいたでしょう。しかし、企画書の中の「地縁・血縁に基づく助け合いなどのコミュニティはこれまで比較的機能してきた」という一文の背景には、ボランティア精神が自然な形で存在しているのでしょう。ボランティアの方々も含め、一度「一肌脱ぐぞ！」となると、大きな力を発揮するのです。

足柄ふれあいの村

そんな中、実行委員の中でいちばん重要な変貌を遂げたのは、「あしがらシニアキャンプ」会場となった足柄ふれあいの村職員の加藤さんかもしれません。

足柄ふれあいの村は南足柄市にある県立の野外教育施設です。利用者の中心はやはり子どもたちなのですが、地域の少子化に対応して利用者の多様化を図りたいという思いを持っていました。また、バリアフリー対応エリアもあるということで、会場として使うことになったのです。しかし、最初からこの認知症高齢者キャンプにぴったりの施設だったというわけではありません。

お年寄りのさまざまな条件を考慮して、たとえば「雨天時にコテージ横まで車を入れられないか」などのいろいろなお願いをするのですが、「ちょっとそれは難しいですねぇ」と言われたこともいくつかありました。ほかの利用者もいるので、その安全も確保しなければいけませんから、ルールを変えるのは簡単ではありません。しかし、参加するお年寄りの身体状況などを考えると、こちらも譲れません。

山本さんをはじめとする保健福祉事務所の方々が、足柄ふれあいの村の方々と何度もひざを交えてこのような話をし、足柄ふれあいの村の責任者である事務所長さんの理解も得ることができました。こうして、全面的なバックアップを得て、キャンプが安全に、円滑に進むためのたくさんの配慮と提案をしてもらえるようになっていきました。キャンプ当日も、加藤さんの配慮に助けられたことがいくつもあります。

「認知症高齢者キャンプをするのに向いているのはどんな施設ですか？」という問いの答は、「ユニバーサルデザインの行き届いたところ」ではなく、「話し合い、アイデアの出し合えるスタッフのいるところ」です。その意味では、結果として、とてもいい施設を使うことができたと思います。

３．活動の内容

キャンプ本番までの流れ

キャンプ本番に向けた準備作業として、連続講座「あしがらシニアキャンプボランティア講座～いつまでも自然の中へ～」とキャンプの予行演習である事前キャンプが行われました。

連続講座は、実際にスタッフとして参加してくださる方々がキャンプについて学ぶ場であると同時に、キャンプには参加できないけれど認知症のことについて知りたいという方の受講もあり、キャンプを素材に認知症のお年寄りとどのように接すればいいかを学ぶことのできる構成になっていました。毎回、４０人前後の方が参加され、この中から中心的な役割を担うボランティアスタッフが生まれました。

あしがらシニアキャンプボランティア講座～いつまでも自然の中へ～講座内容

月　日	テーマ	講　師
7月7日 (土)	シニアキャンプとは ～認知症の方といつまでも自然の中へ～	日本キャンプ協会専務理事　石田　易司
7月14日 (土)	認知症者･高齢者の介護の基本	東海大学健康科学部講師　下西　潤子
	認知症高齢者への望ましい対応	川崎幸クリニック院長　杉山　孝博
8月1日 (水)	キャンプのしくみ	日本キャンプ協会職員　金山　竜也
	キャンプのプログラムを考えよう	足柄ふれあいの村職員　加藤　文昭
8月22日 (水)	高齢者のレクリエーション	芸術教育研究所所長　多田　千尋
	認知症の方への地域支援 開成町円中自治会の取り組み	開成町円中自治会 開成町社会福祉協議会
8月29日 (水)	シニアキャンプの安全管理	日本キャンプ協会職員　金山　竜也
	高齢者の食事 足柄上地域の郷土料理	保健福祉事務所栄養士 食生活改善推進団体いくみ会

キャンプ本番の１週間前、９月２９日には事前キャンプが行われました。参加者は救急法を学び、キャンプ場内の危険箇所をチェックして、その対策を話し合いました。

このとき、食生活改善推進団体いくみ会のみなさんは、キャンプの夕食として提供される食事づくりのリハーサルを行いました。いくみ会の方は大量の食べ物を作ることには慣れているのですが、野外炊事場は勝手が違います。「子どものころは薪でごはんを炊いていたわ」という方もいましたが、すぐに思い出せるものでもありません。注文していた材料とは違うものが届くというハプニングもあり、少し雑然とした状態でした。しかし、その後に綿密な打ち合せが行われ、キャンプ本番の炊事場は完ぺきに統制の取れたものになっていて、リハーサルの大切さを実感させてくれました。この事前キャンプは、雨が降ったりやんだりする肌寒い中で行われ、時間的にも短いものでした。この条件下で参加者のみなさんが十分に当日のキャンプの様子をイメージできたかどうか少し心配だったのですが、このキャンプの総合ディレクターである足柄上保健福祉事務所の栗原部長の「これで雨の場合のシミュレーションができたわ」というおおらかな一言に、「このキャンプは成功する」と確信することができました。

そして、キャンプ本番の前日、１０月６日から多くのスタッフが集まり、事前準備を行いました。

前の週にチェックした危険箇所が目立つようにカラーテープを張り、トイレを使いやすいように整え、楽しい雰囲気を演出する飾り付けを準備し…というように、キャンプに向けたしつらえが整えられていきました。また、お年寄りといっしょに生活をする担当のスタッフは、それぞれのお年

寄りの認知症の状況や介助方法、コミュニケーション方法についての情報交換を行いました。

できる限りの準備はしました。しかし、はじめて認知症のお年寄りとキャンプをする多くのスタッフにとって、不安を完全にぬぐい去るのは難しいことだったかもしれません。

キャンプ本番

翌日、さわやかな秋風の中、キャンプ本番を迎えました。参加者は施設の車に乗って、三々五々集まり、スタッフに温かく迎えられます。

マンツーマンスタッフは事前に顔合わせをしていますから、「こんにちは～。○○さん、覚えてますか？」と聞くのですが、その反応はさまざま。「覚えてるよ～」とニッコリする人もいれば、ただただほほえみ返すだけの人、「うん、うん」と機械的にうなずく人も。参加者のお年寄りも慣れない環境、見慣れない人たちに緊張しているのでしょう。あるいは認知症の状況によって、マンツーマンスタッフと少し前に会ったことをまったく覚えていない人もいるのかもしれません。少しぎこちなさの漂う、しかし楽しげな雰囲気でキャンプは始まりました。

はじまりの集いは、いわばキャンプの開会式です。Ｉさんは認知症高齢者の参加者代表として、キャンプに臨む意気込みを朗々と語りました。思わず、聞いている私たちにも笑みがもれ、緊張がふっと解けたような感じがしました。Ｉさんに対して盛大な拍手が巻き起こったのは言うまでもありません。

ところが、あとでスタッフの一人がＩさんに「いやぁ、立派なごあいさつでしたね」と声をかけると、Ｉさんからは「誰が言うたんか？」との返事。直前の記憶がふっと抜け落ちてしてしまったのでしょう。これは「認知症のお年寄りとキャンプをしているんだな」ということを改めて感じさせられるエピソードでした。

Ｉさんのあいさつでスタートです

昼食を挟んで、午後は選択プログラムの時間です。広場を囲むようにぐるりと用意されたプログラムを思い思いに選びます。たくさんのプログラムが並んだ様子は、秋祭りの縁日のようです。参加者とマンツーマンスタッフは肩を寄せ合い、「次はボウリングをしましょうか？」「お化粧してもらいましょうよ！」と話しながら、広場を行ったり来たりしています。

選択プログラム一覧

	プログラム名	内　容
1	きんちゃくづくり	リサイクル布を使ったきんちゃくなどを作る
2	フレームづくり	既成のフォトフレームにドングリや木の枝を使って飾り付ける
3	お化粧コーナー	プロの美容スタッフにフェイスマッサージとお化粧をしてもらう
4	詩吟・歌謡コーナー	詩吟を披露していただいたり、みんなで歌をうたったりする
5	お休み処	座ってのんびりおしゃべりしたり、ゲームを楽しんだりする
6	ペットボトルボウリング	ペットボトルのピンをゴムボールを転がして倒し、点数を競う
7	ストロー吹き矢	大小のストローで作った吹き矢で点数を競う
8	玉入れ	１０個のゴムボールを的に向けて投げ、入った数で競う

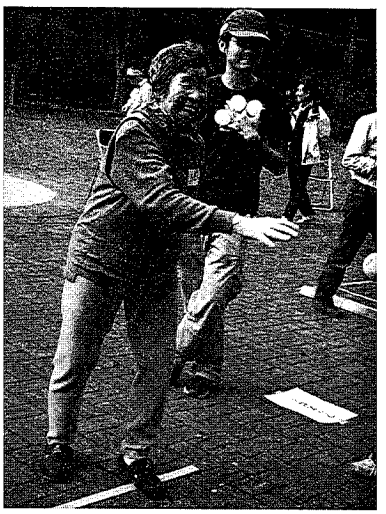
お化粧コーナーはプロの美容スタッフがお化粧をしてくれるのですが、「お化粧してもらいましょうよ！」と呼びかけると、たいてい「こんなおばあちゃんに化粧してもしょうがない」という答が返ってきます。「そんなことないですよ。お化粧はしなくてもマッサージだけでもしてもらったらどうですか？気持ちよさそうですよぉ」と言いながら、なかば強引に席についてもらいます。最初は「化粧なんかいらん、いらん」と口にされていますが、やがてうっとりとした、気持ちよさそうな表情に。口紅をさした顔を鏡で見ると、より一層明るい表情になりました。

詩吟コーナーは、Ｔさんが詩吟を披露したいとの要望を事前に聞いて、小さな舞台をしつらえてありました。ところが、人が集まるお休み処で「ここでいいわ」とばかりに、Ｔさんはよく響く声で詩吟を披露し始め、「え～、Ｔさん、始めちゃったの？！」と、あわてて観客が集まります。私たちのあわてぶりをよそに、Ｔさんはマイペース。その声を引き金に、お休み処のテーブルはやがて歌合戦の会場に姿を変えていました。

ペットボトルボウリングや玉入れのコーナーからは、ときおり、大きな歓声が響きます。お休み処はいつの間にか黒ひげ危機一髪のコーナーにくら替えして、大きな笑い声を発しています。クラフトのコーナーからは穏やかなおしゃべりの声が絶え間なく聞こえてきます。こうして、２時間の選択プログラムの時間は終わりました。

お化粧の仕上がりを確認

力強い声で詩吟を披露



的めがけてボールを投げます

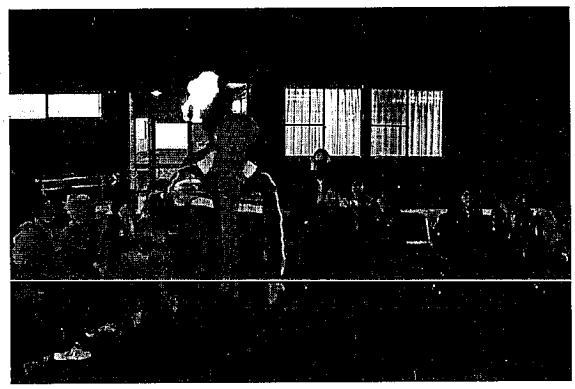
しばらく休憩したあと、いくみ会のみなさんが用意してくれた食事がテーブルに並びました。テーブルに置かれたランタンときれいなお品書きで雰囲気は満点です。献立は、懐かしさを感じさせる郷土料理を取り入れ、けんちん汁にシャケのホイル焼き、小松菜の煮浸しとフルーツヨーグルト。事前キャンプでのリハーサルの成果もあって、しつらえは完ぺきです。夕方になったせいでしょうか、少し情緒不安定になられたのか、「味がついてない」との声をあげられる方がいて、あわててお醤油を用意する場面もありましたが、みなさんがほぼ完食。マンツーマンスタッフと会話を交わしながら、ゆっくりと食事を楽しみました。

夜のお楽しみはやっぱりキャンプファイアーです。しっかり防寒着を着込み、ひざ掛け代わりの毛布を用意して広場に集まりました。Ｓさんによる点火でキャンプファイアーはスタート。「夕焼け小焼け」のような誰もが知っている歌をうたったり、簡単な手遊びをしたりして楽しみます。３０分あまりの短い時間でしたが、最後は徐々に小さくなる炎を見ながら、静かにそれぞれのお部屋

に戻りました。

その後、9時ころにはほとんどの方が眠られたようですが、なかなか寝付けない方もいたようです。その方は日常的に夜になると少し不安になって、「うちに帰る」と言われたりするそうなのですが、いつもと大きく環境の異なるキャンプ場で、その不安がいつもより少し大きくなったのかもしれません。また、お休みなった方も夜中に何度もトイレに起きてこられます。2つのコテージそれぞれに寝ずの番がついたのですが、1時間おきに起きてこられる方もいます。その横には眠そうな顔のマンツーマンスタッフ、そして、ごく自然に寄り添う施設のスタッフがいて、参加者が安全に寝床に戻れるように誘導しています。早朝3時ころには目を覚まされる方もおり、寝ずの番のスタッフとともに、あんパンをおやつにのんびりとお茶の時間を楽しみました。

お品書きもあって、料亭気分？



キャンプファイアーに点火

夜のうちに天気は崩れ、2日目は朝から雨になってしまいました。

小雨になり、「このままやんでくれるかな？」と思えた瞬間もあったのですが、結局、雨が降りやむことはなく、雨用のプログラムに変更。広い集会室に移動しました。

みんなが扇状に座り、歌をうたいます。歌のリクエストを聞く合間に出身地をうかがうと、この土地で生まれ育ったという方々に混じって、会津、北海道、そして台湾や朝鮮の出身だという声も聞かれ、参加者のみなさんの生きてこられた歴史が感じられます。

その後、車いすダンスを楽しみ、おわりの会を迎えました。一人ひとりにマンツーマンスタッフとのツーショット写真の張られた表彰状が渡されます。これはプログラムスタッフの労作で、参加したプログラムが一目でわかるように工夫され、この2日間を思い出すためのアイデアにあふれたものでした。

記念撮影が終わると、参加者のみなさんはそれぞれの施設の車に乗り込みます。「さようなら」「ありがとね」「お元気で」それぞれに言葉をかけながら、車を見送りました。

車いすに乗ってダンス

写真の入った表彰状を受け取ります

４．活動の成果と今後の展望

６つの理由

こうしてキャンプは無事に終わりました。日本キャンプ協会から参加していた２人を除くと、認知症高齢者のキャンプを経験したことのある人はいないわけですから、お年寄りを見送るまでのスタッフのみなさんの緊張と、その後の安堵はとても大きなものだったでしょう。お年寄りが帰られた直後のスタッフミーティングでは、「参加してよかった」という声が多く聞かれました。

このときもっとも大きな安堵を感じていたであろう、この事業の言い出しっぺである足柄上保健福祉事務所の山本さんに「このキャンプをやってよかったなぁと思う理由を“５つ”教えてください」とお願いすると、次のような“６つの理由”が返ってきました。

① 認知症高齢者の方とボランティアスタッフにたくさん笑ってもらえた
② 足柄上地域の課題であると考えている世代間交流がさまざまな形で図れた
③ 多様な立場の人たちの出会いの場が作れた
④ グループホームのプログラムに野外活動を入れてもらえる可能性が出てきた
（ふれあいの村に自分たちで行こうというグループホームが現れた）
⑤ 認知症の方の健康的部分に周囲がかかわり、幸せそうな顔を見られたことで家族の積年のつらい気持ちが和らいだ人がいた
⑥ 家族も高齢者も施設職員もボランティアもスタッフも、それぞれ関係を持つことで「やる気」「勇気」「がんばる気」を与え合うことができた

どれも「なるほどなぁ」と思えることばかりです。

①の笑顔は、確かにキャンプの期間中、あちこちで見られました。はじまりの会で見事なあいさつをしたＩさんの得意げな笑顔と、それを見つめる周りの人たちの笑顔。広場の片隅でマンツーマンスタッフと話しながら、自然とあふれてくるほほえみ。プロの手で化粧をしてもらって、鏡を見つめるうっとりとした笑顔。ペットボトルボウリングで高得点を取ってニコリ。キャンプファイアーのときのゲームで失敗して、大きな笑い声が起こったこともありました。そう言えば、夜中に「おなかすいた～」と本部にやってきて、カップラーメンをすする若いスタッフも笑顔でした。記念撮影はもちろん笑顔で。そして、参加者のお見送りのときも、笑顔で手を振り合いました。

キャンプ終了直後のスタッフミーティングでは、涙顔もちらほらと見られましたが、それはうれしい涙だったように思います。

②の世代間交流については、シニア世代のボランティアの方々の張り切りと、心遣いが印象的でした。認知症がテーマの講座であれば、受講者がシニア世代に偏るということはよくあるでしょう。しかし、今回はそこにキャンプという実践が伴ったため、高校生や大学生も参加していました。おじいちゃん、おばあちゃんと孫ほどに違う世代がいっしょにうまくやれるかなというのは無用の心配でした。

シニア世代の方々がリーダーシップを発揮し、若者はそこから素直に学ぶ。そして、自分たちで動き出し、シニア世代の方々が温かく見守る。そんなことが自然に起きていたような気がします。

③の多様な立場の人たちの出会いは、今回のキャンプを支えた重要な要素でしたし、これからの新たな展開を生み出す種子となるものでもあります。キャンプの期間中、「今度、うちにもボランティアに来てくださいよ」という、“ボランティア活動の商談”があちこちで行われているのを耳にしました。こうして地域の中でボランティア活動が広がり、ボランティアの存在が定着していく

ならば、確かに「キャンプをやってよかったなぁ」と思えます。

高校生や医療や福祉を学ぶ大学生、研修医、社会福祉施設職員などが協力して動く中で、進路や将来の夢について話し合う場となったことも評価できる点です。

④の認知症グループホームが野外活動をレクリエーション活動に取り入れる可能性が出てきたことは、「キャンプをいろんな人に楽しんでもらいたい」と考えている私たちにとって、とてもうれしいことです。自然の中で素朴な生活を体験するキャンプは、今の高齢者に向いた活動です。認知症の方にとっては、マンツーマンスタッフとともに過ごす時間は心地よいものですし、回想法のような効果も期待できます。季節の変わり目ごとに自然の中に出かけてみる、そんなことが当たり前になったら素敵です。

⑤のご家族に与えた影響については、キャンプの数日後、こんな話を聞きました。

グループホームで暮らすＹさんは、奥さんとともにキャンプに参加されていました。キャンプ期間中のＹさんは穏やかにほほえんでいて、「やさしそうな方だな」と思っていたのですが、若いころには家庭内で暴力をふるうこともあったとのことで、奥さんは大変苦労されていたそうなのです。しかし、キャンプの１泊２日の間、若いボランティアスタッフと過ごすＹさんはとても穏やかで、楽しそうで、奥さんは「昔のことはもういいわ」と思えたというのです。私には奥さんの心の中まではわかりませんが、奥さんがそう思える場面をこのキャンプで提供できたことは本当にうれしく思います。

また、Ａさんの息子さんご夫婦は、「手伝うつもりで来たのに、母のことはボランティアさんに任せっきりで、私たちもすっかり楽しませてもらいました。こんなに手伝ってくれる人がたくさんいるなんて思ってもいませんでした。夢のようです」という感想を残してくれました。たとえ自分の親のことであっても、日々の介護はとても大変なものです。献身的に働くボランティアの姿を見て、元気とか勇気とかを持ち帰ってもらえたとしたら、これもまた本当にうれしいことです。

⑥のみんなが「やる気」「勇気」「がんばる気」を与え合うことができたというのは、山本さん自身が「やる気」「勇気」「がんばる気」をもらったということを意味するのでしょう。これは心強いことです。

このキャンプの準備を進める中で、私は山本さんから「このキャンプは足柄上だからこそ、できるんだと思うんです」という言葉を何度か聞きました。これはたくさんの人たちの理解と協力を得られたことに対する、山本さんの感謝の気持ちの表れでしょう。もちろん、私の立場からは「ほかの地域でもできますよ」と言いたくなりますけれど、このキャンプを通じて、山本さんが足柄上という地域に対する信頼を強くできたことは、本当によかったと素直に思います。ボランティアとして参加した県立病院の研修医からは「認知症というレッテルを貼って社会的に制限するのは間違いかも」という声が聞かれました。こんなふうにこのキャンプに参加した施設職員や行政職員、社会福祉協議会職員、そして地域の方々が「やる気」「勇気」「がんばる気」を見つけたなら、今後、この地域には認知症のお年寄りが暮らしやすくなるための試みがあちこちで生まれてくるはずです。

この事業の企画書には事業の趣旨が以下のように書かれているのですが、山本さんの“６つの理由”を見ると、事業の目的はほぼ果たされたと評価していいと思います。

【事業の趣旨】

① 認知症高齢者等が野外でのキャンプを通じ、自然やボランティアとふれあい、安心のおける環境のもとで自分を取り戻すプログラムに参加し、QOL の向上を図る。

② 若者を中心とした地域のボランティア参加を促進し、ボランティア養成講座やキャンプへの参加により認知症への理解を深め、認知症になっても安心してノーマルに暮らせる地域づくりを考えるきっかけとする。

③ 地域で認知症高齢者等の支援にかかわっている、市町の地域包括支援センターや民間の老人ホーム・訪問介護等の関係機関が、日常生活とは異なる環境・プログラムでの高齢者とのかかわりにより、認知症高齢者が生き生きと暮らす時間を持つ可能性について模索し、理解を深める機会とする。

④ キャンプ場関係者や市町の観光振興担当者が、高齢者向けの野外活動プログラムの検討・実践を経験することを通じて、地域内の野外活動施設における高齢者利用の拡大を図る一助とする。

もっと気軽にキャンプができるように

地域における認知症の理解を深めるという意味では、高い点数を与えることのできるキャンプでしたが、ここでは少し違った視点で評価をしてみたいと思います。

今回のキャンプでは、１７人の参加者に対して２０人以上がかかわる実行委員会が組織され、１００人以上のスタッフがキャンプを支えました。この規模の大きさについては、少しマイナスの部分があったのも事実です。

まず、この大きな組織を動かすための大変な労力が必要だったことが指摘できます。資料を作り、時間の調整をし、スタッフの出入りを把握するといったことに事務局は多くの時間を割くことになりました。また、１００人のスタッフは１泊２日の間ずっといたわけではなく、ある人は選択プログラムの時間だけ、ある人は食事づくりだけというように、たくさんの人が出入りしていたため、雑然としてしまった部分もあります。

もちろん、今回のキャンプは、キャンプをきっかけにできるだけ多くの人に認知症の方を支えるチカラになってもらおうという目的があったので、たくさんの人がかかわることのできるこの方法を否定することはできません。しかし、この次はもっと気軽に、もっと小さなグループでキャンプができるようになればいいなと思います。

この私の願いは、山本さんの“６つの理由”の中にもあったように、この地域で来年、さっそく実現するかもしれません。

キャンプでのお年寄りのイキイキとした姿を見て、あるグループホームが生活の中に野外の活動を取り入れたいと考えているというのです。グループホームの入居者は９人。マンツーマンのスタッフと、食事などの生活部分をサポートしてくれるボランティアが全部で１５人も確保できれば、キャンプは可能になります。デイキャンプならば、もっと気軽にできるでしょう。

グループホームなどの福祉施設では、利用者の生活の質を高めるレクリエーション活動の必要性を強く感じながら、実際にはなかなか難しいという現状があります。しかし、このキャンプを通じて、その必要性を再認識し、ボランティアの協力を得て行うキャンプという方法の可能性を確認しました。同時に、地域の中で認知症のお年寄りのキャンプをサポートしてくれるボランティアも育ちました。社会福祉協議会などが両者をつなぐコーディネートすることができれば、この地域に認知症高齢者のキャンプが根付いてくれるのではないかと思います。

お年寄りにキャンプは向いている

スタッフとしてかかわった人の中には、今でも「やはり認知症高齢者にキャンプは危険なのではないか」という思いを持っている人がいるかもしれません。考えれば考えるほど、野外での活動は施設の中にいるより危険がいっぱいあるような気がしてきますし、普段と異なる環境に置かれることでお年寄りを不安な気持ちにさせてしまうこともあるでしょう。

でも、私は認知症のお年寄りにキャンプは向いていると思っています。自然の中で遊んだり、薪で炊いたご飯を食べたりすることは、若く元気だったころに体験してきたことです。懐かしい環境の中での活動には回想法のような効果も期待できるでしょう。安全に関しても、周囲の人がいくつかの配慮をすることで、危険を極力小さくすることが可能です。そして、キャンプに来たことで、いつもと違う環境に不安な気持ちになって、少し不安定な状況になられたとしても、それは必ずしも悪いことではないと思っています。たとえ認知症になっても、新しい人に出会い、新しい経験をすることによって人は成長すると考えれば、なんの刺激もなく、なんのトラブルもないことがベストな選択だという考え方は消極的に過ぎるでしょう。キャンプの中で少し不安定になられる場面があっても、それはイキイキと楽しく過ごした時間を帳消しにするものではないと思います。

キャンプという非日常の場だからこその気づきがあります。今回のキャンプでも、保健福祉行政の立場から、社会福祉協議会の立場から、社会福祉施設の立場から、高校や大学といった教育機関の立場から、野外教育施設の立場から、そして地域住民であるボランティアの立場から、さまざまな気づきがありました。これらの気づきも、認知症のお年寄りがキャンプに参加してくれたからこそ得られたものです。もちろん、1回のキャンプで地域社会ががらっと変わるとは思っていません。でも、小さな種子はたくさんまくことができたかなと思います。この先、この種子から認知症のお年寄りの生活の質を高める小さな芽が、たくさん出てくることを期待しています。

たくさんの地域のチカラがキャンプを支えた